一生の思い出 in　ヴォルフラーツハウゼン

寺岡　優美

私は、今回の派遣が初めてのドイツ、初めてのホームステイだったので、行く前は期待と緊張の混ざった思いでした。派遣団のみんなと一緒だとは言っても、ホームステイ先では１人だし、自分の英語がうまく伝わらなかったらどうしよう、などという思いもありました。しかし、そんな不安は初日の歓迎会であっという間に解消されました。ドイツの人々が本当に温かく私たちのことを迎えいれてくれたからです。

バスから降りて、歓迎会の会場のレストランの前で降り立った時、真っ先にホストシスターのシュテファニーが私を探しに来てくれました。彼女は私より１つ下でしたが、とても大人っぽくて、私の重い荷物をてきぱきと自分の車に運び込むなどして、異国の地で戸惑う私を気遣ってくれました。彼女とは年が近かったこともあり、つたない英語ながらもがんばって色々なお話をしたので、その日の歓迎会のうちに打ち解けられたと思います。歓迎会が終わってホストファミリーのお家に着くと、家主のカイさんと、妻のクラウディアさんが優しく迎え入れてくれました。最初に家の中を一通り案内してもらったのですが、とても広いお家で驚きました。また、私のために用意してくれた部屋に入ると、きれいに畳まれたタオルの一式と、お菓子と飲み物が置かれていて、その気遣いが本当に嬉しかったです。ホストファミリーはみんな流暢な英語を話すので、ある程度聞き取ることはできましたが、自分の伝えたいことが思い通りに伝えられないもどかしさを感じながら、一日目が終わりました。

翌日からは、本当にたくさんのプログラムで、休む間もないくらい充実した毎日でした。また、日々のプログラムをこなす中で、どこへ行ってもバイエルン地方は本当に自然が豊かなことに驚かされました。これはミュンヘン空港に降り立った時から感じていたことですが、青い空と白い雲が今まで見たことがないくらい綺麗で、それだけでどこへ行くにも気持ちがよかったです。道路沿いには緑が広がっていて、たくさんの牛や羊を見ることができました。また、アルプスの山々も近くて、自然いっぱいののどかな風景を見られただけで、はるばるドイツまでやってきた甲斐があったなと感じました。さらに、毎日たくさんのプログラムの中で、素敵なレストランでお昼を食べさせてもらっていたのですが、噂に聞いていた通り、肉とポテトが中心でした。味はどれも食べやすく、派遣団のみんなもおいしいと言っていましたが、とにかく量が多くて、飲み物のコップからして日本の物とは大きさが違いました。残念ながら、完食できた日は１日もなかったのではないかと思います。

また、毎日のプログラムにたくさんのヴォルフラーツハウゼンの人々が着いて来てくれて、たくさんの人々の協力のもとにこの事業が成り立っているのが実感できました。みなさん本当に親切な人ばかりで、行った先々で行った施設の説明を一生懸命してくれたり、ドイツの青少年たちとも日に日に仲良くなれて、10 日間という期間があっという間に感じてしまうほど楽しい日々を過ごせました。最後のお別れ会では、その感謝の気持ちをこめて、日本の文化を見せて、おもてなしをし、私自身も派遣団の青少年リーダーとして皆さんの前でスピーチをしましたが、スピーチを考えている時も、出し物をしている時も、言葉では言い表せないほどの感謝だなと思いながらのお別れ会でした。市長やそれぞれのホストファミリーを始め、お世話になった人々が熱心に、私のスピーチを聞き、出し物を見てくれていたことで、また感謝の気持ちでいっぱいでした。

日本へ帰ってからも、インターネットを通じての交流や手紙のやりとりは可能なので、この訪問で芽生えた友情を大切にこれからも交流を続けていきたいと思います。また、彼らが日本に来た際には、お世話になった感謝の気持ちをこめて、精一杯おもてなしをしたいと思います。10 日間の中で、たくさんの貴重な経験と国を超えた友情をもたらしてくれた今回の訪問は、私にとって一生の思い出です。本当にありがとうございました。

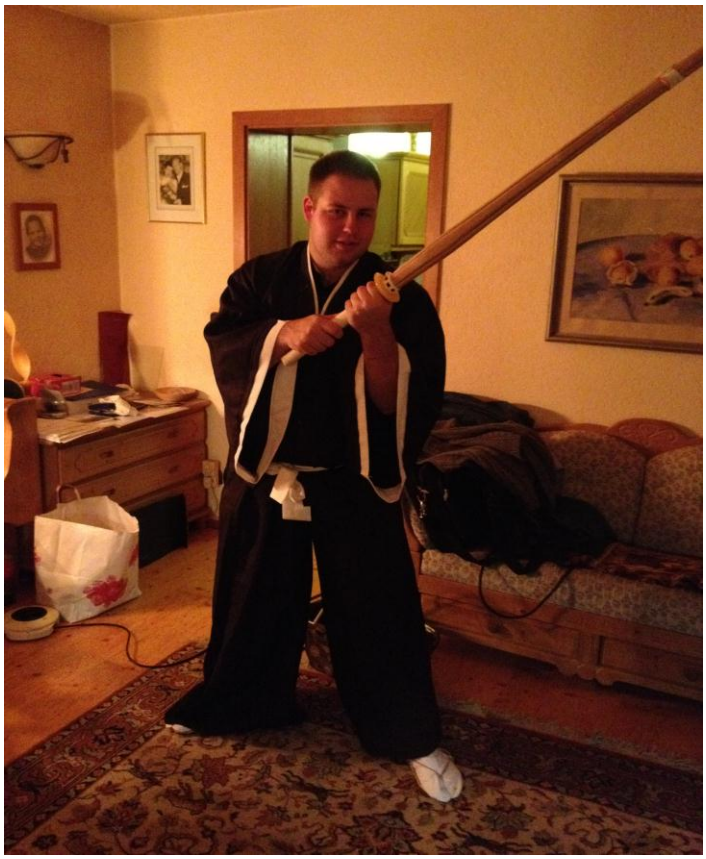
クリスとの思い出

住田　快登

派遣事業団の面接を終えた僕は一抹の不安を抱えていた。というのも面接に行くと名札が配られるのだが、そこには男の子の名前らしき名札がなかったのだ。「これはもしかしたら受かっても男の子は自分だけかもしれない…」そう思いながら５月、初顔合わせがあった。
僕の不安は的中した。高校生４人、僕を抜いた大学生３人はすべて女の子であった。「何をやっている！日本男児！いや、入間男児！今こそ国際交流のために立ち上がれ！」と思ったものである。
しかし、事前研修の回を重ねるごとに紅一点ならぬ黒一点であった僕を受け入れてくれたように思う。
　さて、本題に入ろう。12 時間の渡航などこれから訪れるであろう素敵な 9 日間を想像すればなんてことなかった。ミュンヘン空港に着くとヴォ市の方々がお迎えに来てくれていたのだが、いきなり心温まる出来事に遭遇する。これだ。

このカードを持っているのがクリス。僕が 9 日間お世話になるホストファミリーの長男だ。僕は最初、これを見たとき「あ、入間市以外にも墨田区から来ている日本人がいるんだな。」と本気で思った。しかし違った。僕の名前は「住田快登(すみだかいと)」ファーストネームから言えば「かいとすみだ」「かいとうすみだく」に遠いこともない。いや、最早正解であろう。クリスは音から一生懸命漢字を調べてくれたのだろう。これに気が付いたとき僕はとっても嬉しかったのは言うまでもない。

その後も 9 日間を通してクリスはとってもいいやつだった。日本のアニメが大好きでコスプレまでしてしまうクリス。



日本語に興味を持ち、教えた日本語をどんどん使ってくれた。
9 日間中 8 日間同行してくれて、僕以外の派遣団員ともすっかり仲良くなり人気者であった。しかも同行しなかった 1 日はお別れの際にひとりひとりに書いた手紙と CD を作ってくれていたのだ！年が近いこともあり、クリスの部屋でお酒を飲み、女の話に花を咲かせることもあった。若い男が考えることなんて万国共通だと感じることもできた。ある意味「草の根の国際交流」ができたのではないかと思う。
お別れの際は僕だけでなく他の派遣団員も号泣。クリスも号泣。僕のヴォ市での 9 日間はクリスなしには語れない！本当にありがとう！10 月には入間に来ることになっているのでクリスにまた会えることが今から楽しみだ！

ヴォルフラーツハウゼン市訪問を終えて

齋藤　麻衣

約 12 時間ものフライトを終え、ミュンヘン空港に降り立った時点でへとへとになっていた私ですが、バスに揺られてヴォルフラーツハウゼン市に近づくにつれ、おとぎ話の中にいるかのような素敵な風景、街並みになっていき「外国にきたんだ」と実感し、興奮しました。歓迎会では、いきなりホストファミリーとの対面で、緊張する間もありませんでしたが、心配していたコミュニケーションもなんとか英語で会話できるとわかり安心すると同時に、これから始まる十日間もの滞在がとても楽しみになりました。
毎日びっしりとつめこまれたスケジュールをこなしながら驚いたのが、いたるところに牛や馬が放牧されているということです。ヴォ市は自然豊かな都市だとは聞いていましたが、まさかここまでとは、と広大な緑を前に圧倒されたことを覚えています。（あまりにも多すぎて慣れてしまいそのうちみんなまったく反応しなくなりました。）

とにかく毎日予定がたくさんで充実した時間を過ごせました。特に思い出深いのが、湖に泳ぎに行ったことです。

泳ぎに行くことになり、わくわくしながら向かった先は鬱蒼と茂る森だったので、ドイツ人のワイルドさを見せつけられた気分でした。日本人ならまずここで泳ぐという発想が出てこないだろうなーと思いつつ、恐る恐る泳いだのは今となってはいい思い出です。ヴォルフラーツハウゼン市のまわりには泳ぐことのできる湖がたくさんあるらしく、週末は多くの人が湖で過ごすそうです。余暇の過ごし方が日本人よりも健康的で、環境も含めうらやましいなと思いました。

とにかく毎日びっしりとつめこまれたスケジュールをひとつひとつこなすことに精一杯で、あっという間に９日間が過ぎてしまいました。しかしお別れパーティには本当にたくさんの人が集まってくださり、この人たちの尽力のおかげで私たちは充実した毎日を過ごすことができたのだとやっと理解し、胸が熱くなりました。

最終日のお別れのとき「いつでも帰っておいで」と言われ、またいつか必ずヴォルフラーツハウゼンを訪れるという目標ができました。また、今回の事業でできた友人との交流を個人レベルでも続けていくことで、姉妹都市交流の目的である草の根外交を続けていきたいと思っています。

最後に、この事業を支えてくださったすべての皆様に厚くお礼申しあげます。ありがとうございました。

ドイツでの思い出

酒井　佑果

この事業は私にとって初めての海外渡航でした。出発前はいろいろと不安を感じていましたが、ホストファミリーのホッフマン家をはじめとした、ヴォ市の方々、派遣団員のみんな、それ以外にも大勢の周囲の人々のサポートがあって、ドイツでの日々を思いっきり楽しめたことを感謝したいです。

ホームステイの序盤の頃は、慣れない家に慣れない英語、何もかもが不慣れなことだらけでしたが、徐々に慣れていき、ホストファミリーとの交流を楽しむことができました。私もまた、片言の英語で、ホッフマン家の方々と様々な話をすることができました。英語で外国人とコミュニケーションをとるという経験は、ほとんど初めてだったので、ホストファミリーとの交流は、とても貴重で忘れられないものになりました。

　ホストファザーのヴィクトールさんは、隕石や鉱物を専門とした地球物理学者で、世界各地を発掘のために訪れていて、日本にも 12 回来たことがあるという大変な日本通でした。東日本大震災の後も東北を訪れたらしく、被災地で撮ってきた写真を私に見せてくれたり、東北に住むヴィクトールさんの友人の被災体験を語ってくれたり、震災当時の私の状況などについて尋ねてきたり、と、こんなに遠く離れたヨーロッパの人も、日本の大きな災害に関心を寄せてくれていることを実感しました。

ホストマザーのアンゲリカさんも常に優しくて、私が英語を聞き取れない時も何度も繰り返してくれたり、最終日にはヴォ市を案内してくれたり、と他にも本当に様々な面でお世話になりました。また、日本の文化に興味を持って、たくさん質問してくれたのが嬉しかったです。「日本人がよくやる『一本締め』のルーツは何？」「日本人はどれだけの数の漢字を知っているの？」「日本人の子どもは行儀がよくおとなしいのはなぜ？」など、私が今まで考えたことの無かったような質問をされて、改めて外国の視点から見た日本について考えさせられました。

リディアとは、互いに人見知りで、かつ私の語学力が乏しいため、なかなか最初は積極的にコミュニケーションがとれませんでした。しかし、私が話す日本の文化について興味深く聞いてくれたり、時にはカードゲームをしながら、言葉が無くても仕草や表情で意思疎通ができるということを実感させてくれたりと、少しずつ打ち解けられたと思います。

最終日に「ドイツに来て感じた、ドイツ人の印象は？」とホストファミリーに

聞かれた時、私が、「ドイツの人は活発で、陽気で、とても親切だと思う。だけど、日本ではドイツ人はとっても真面目だと思われていることを知っていますか？」と答えたら、「確かにドイツ人がそう思われているのは知っているけど、ドイツの中でも地方によって特徴があるし、必ずしもそうは言えないと思う。日本人だって真面目でおとなしいと言われているけど、あなたの周りの日本人が必ずしもそうとは言えないでしょ？」と言われました。
この時、改めて私たちは日本とドイツという遠く離れた場所で生きてきたのだということを感じ、そして、そんな私たちが直接会って、お互いの民族性についての話をしていることが不思議で、だけど貴重なことのように感じられました。
これだけ距離がある国同士では、偏見や先入観などでしか、相手の国を知ることができない場合もあります。だけど、直接会って話をして交流すると、偏見や先入観で語られるものは、その国の一部分でしかないのだとすぐに分かります。そのことを実際に自分で経験して感じることができたことが嬉しいです。
ホストファミリーとの交流以外にも、毎日毎日、これ以上無いというほどに詰め込まれたスケジュールの中で、ここに書ききれないほどたくさんの楽しい経験をしました。お城に行ったり、山に行ったり、湖に行ったり街で買い物したり・・・この事業に尽力してくださった全ての人に感謝したいです。ありがとうございました。
短い期間でしたが、豊かな自然の中で、ゆったりと暮らしている、親切で明るいヴォルフラーツハウゼン市の人たちを大好きになりました。いつか、また行きたいです！！

ドイツでの９日間を終えて

小野　真理子

ヴォ市に足を踏み入れたとき、初めに思ったのが「みどりが多い」ということでした。前に住んでいたフランクフルトも緑が多い印象を受けましたが、背景の山も手伝って、よりそう感じたのだと思います。日本と違うさわやかな空気。暖色系の屋根が並ぶ可愛い街並。あたたかい人々。それらが、初めてのホームステイに身構える私を、優しく迎えてくれました。

ドイツに到着してすぐの歓迎会で、カチコチの笑顔の私にホストファミリーのウリとアントニアは、懸命に話しかけてくれました。１年ちょっとドイツ語の基礎をやってきたので、少しは分かるかなと期待していましたが、基礎は基礎。残念ながら異国語にしか聞こえませんでした。怪しい英語力で日常生活を乗り越えるのは歯がゆくもありましたが、とても面白かったです。

いつも優しく接してくれましたが、特にホストファミリーとの仲が深まったと感じられたのは、７ 日目に開かれた湖でのホームパーティーです。友達の家族も呼んで４家族ほどで行われたもので、私はひたすらに食べて話して楽しみました。元気に駆け回る小さな子どもたちや、静かに浮かぶヨット、対岸に沈む美しい夕日を眺めるのも大変楽しかったです。主にホストファミリーとでしたが、沢山話したことでお互いの距離が縮められたとおもっています。

またこの晩、ドイツでの残り時間を惜しむように、眠い目をこすってアントニアと遊んだ UBONGO というゲームがとてもおもしろかったです。お別れ会前夜、ホストファミリーからも、流れる時間を惜しむ気持ちが伝わってきました。「私も同じ気持ちだよ」って言えば良かったと、今になって思います。

ホストファミリーとの時間も素晴らしい経験でしたが、朝からみんなで回る沢山の場所もバラエティーに溢れていて、とても興味深かったです。ヘレンキームゼー城、ミュンヘンでのショッピング、ヴ゛ォ市の森を歩いた（転んだ）こと、民族衣装の試着、などなど。

特に印象に残っているのは、ミッテンヴ゛ァルト・ボスナー・マルクトというお祭りです。ドイツの伝統的な街並が再現されていて、他にはない独特の雰囲気を醸し出していました。５２５年の歴史ある祭の空気、あれこそが「バイエルンらしさ」の姿だったのだと思っています。

ミュンヘン市

パフォーマー

ドイツで過ごした９日間は短いものでしたが、とても濃密な時間を過ごすことが出来ました。ホストファミリーとの親交も深まり、かけがえのない仲間や経験も沢山出来ました。この貴重な経験は、きっといつか私の芯となってくれるはずです。私はこの９日間を単なる思い出にせず、未来への糧にしようと思います。

ひとつ思ったのは、語学力のこと。とっさに使える英語力が低くて、私はずっと電子辞書を持ち歩いていました。笑顔が万国共通のものでも、より深い国際交流を目指すためには、語学が大切なものなんだと思い知りました。

ドイツ語も基礎だけだとダメでしたが、今の基礎が、会話に繋がると信じて勉強します。またいつか、ドイツに行った時にばりばり話せるようになりたいです。そしてホストファミリーを驚かすのも今の小さな夢です。

最後に、この派遣事業には沢山の人が努力して下さったことを、事前研修やお別れ会で感じました。派遣事業に関わっていた全ての方々に、感謝の気持ちを伝えたいです。本当にありがとうございました！

Danke! Bis bald!

ヴォルフラーツハウゼン市にて

石山　陽葉

今回のドイツ訪問は私にとっては初めての海外でした。家族も一緒に行くというのならともかくですが、一人で十日間、しかも一人でホームステイだったので、ホストファミリーと上手く打ち解け合うことができるかや、英語がちゃんと通じるかどうかなど、たくさんの不安が頭の中をグルグルと駆け回っていました。

しかし、現地に到着してみると、ヴォ市は本当に素晴らしい街で、たくさんの人達が温かく迎えてくれて、ついさっきまでの不安が一気に解けてなくなっていきました。

私のホストファミリーも、他のホストファミリーも、交流協会の人達も、始めて会ったにも関わらず、まるで本当の家族のように、まるで昔から知っている友達のように接してくれました。

素晴らしかったのは人だけではありません。建物もそうでした。比較的にそれほど高い建物は無くて表通りは道が広く、薬局、本屋、服屋、小物屋、お菓子屋、レストランなど、様々なジャンルの店がズラリと立ち並び、ショッピングモールのようになっていて、とてもオシャレで映画の世界に入り込んだような気分になりました。

ちなみに、ドイツ人はひょうきんな人達ばかりで、夜になると近所の人と集まって、家の前の通りで楽器を演奏したり、歌を歌ったり、お酒を飲んだりしながら皆でビアパーティーをしていました。（本当は他の家の迷惑になるそうでダメらしいのですが、ここは特別なのだそう・・・。夜中の一時までやるのは当たり前らしい。）

ドイツは意外と日本のポップカルチャーが浸透していて、日本のアニメがほ

とんどでした。私のホストファミリーは、日本が好きらしく、ホストマザーであるキャシーは、ジブリ作品が好きで、となりのトトロやハウルの動く城などのドイツ語版 DVD を持っていました。（日本の歌手も少々・・・）
　また、私のホストファミリーに限らず、たくさんの人が日本に興味を示してくれていました。　例えば、日本語。　私が平仮名の読み方と書き方を教えると、喜んで何度も何度も練習して、自分の名前を書いてみたり、他の人の名前を書いてみたり・・・。　そのうちに、「これは漢字でどう書くの？」とか、「これは日本語で何て言うの？」などと聞いてくれるようになりました。
　やはり、自分の国について興味・関心を抱いてくれるのは嬉しい事なんだな。と思いました。

　ドイツでは本当にたくさんの経験と思い出を作ることが出来ました。
ドイツ人の友達が出来た事はもちろん、マクドナルドの厨房見学や山登り、お城見学や民族衣装の試着など・・・。どれも一生忘れる事は無いでしょう。十日間は本当に短い期間で、あっという間に過ぎてしまいましたが、またいつか、ヴォ市を訪れたいと思ったし、私にとってヴォ市は第二の故郷になりました。
　本当にありがとうございました！！

初めてがたくさんのドイツ

新井田　ひなの

中学３年生の終わりごろに、学校でくばられたチラシが、ドイツへ行くきっかけとなったものでした。前々から本や音楽を通してドイツに興味があった私は、級友であった宇津木さんを誘ってこの事業に参加しました。

ドイツはもう、とにかくあらゆるところにおいて予想外ばかりでした。とくに食事。食事はほぼ甘いものか肉かポテトか肉でした。しかも肉がけっこう丸焼きな感じで出たりするのでモノによってはワイルドかつグロいです。とりわけまいさんがホーフブロウハイスでたのんだ肉はもろに膝関節あたりの肉で、「いくしかない」と膝部分の関節骨の切断をはじめたときはなんだか自分の膝がキリキリ痛くなりました。すぷらったェ・・・。・・・ホーフブロイといえば、軍曹ことクリス父とのファーストコンタクトもありました。完全に知らないおじさまだと思ってたので声を掛けてきたときはびっくりしました。でもめっちゃええ声だしめっちゃビール飲むしめっちゃフレンドリーだし、かわいかったです。

初日の農場はすごく素敵でした・・・・豊かな自然にかこまれて、人間本来の生き方をするような、あんな生活がしたいです。「農業は環境保護」という考えも素敵でした。

郷土博物館では館長さんがとても熱心にはなしをしてくださり、一つ一つの展示物に丁寧な説明をしてくださいました。

ヘレンキムゼーなどのお城めぐりはすごく勉強になりました。両面鏡で空間拡張っていう発想ははじめて見たので、面白いなあ。と。ヘレンキムゼーのお城に着くまでの船と馬車がまたよかったです。観光地だからでしょうが、素敵ですねえ。

マンモス博物館ではやはりこれ！

恐竜の口に入ったアレです。住田先輩のリアルな苦悶顔には笑いました。
　森の散策では異様にぬるりとした蛞蝓にさわってしまい、ぬるぬるがいくら拭いてもとれず不快感に身悶えしました。ヤスミンが森のアトラクションのお手伝いをしてくれるのですが、色々とパワフルすぎました。

幅跳び対決もよかった！
　ブロムベルクではジャンプ補強器（？）のようなものを体験できました。最初のほう怖かったけど慣れると楽しくて、回ったり跳ねたりはじめての経験でした。山のレストランはハエがすごかったです・・・ドイツには蝿が異常に沢山います。人の影あるところに蝿ありという感じで、どこに行ってもいる。でもソーセージすごくおいしかったです！ドイツの食事の中で No.1 のお味でした！

　ミュンヘンでは色々買い物できて満足です！ドイツの文化にちょこっとですが触れることができたかな、と思います。デパートで売っていた蛍光色ピンクのホールケーキには戦慄しましたが。
　ミッテンヴァルトのバイオリン博物館はとってもかわいかったです！トーキー映画みたいな、ヴァイオリンの歴史をたどった動画が特によかった・・・。焼き増ししてお持ち帰りしたいくらいに素敵でした。ヴァイオリン工房もアンティークな感じで素敵でした。

ミッテンヴァルトの町は本当におとぎの国そのもの！ピンクと白のかわいいボーダーのおうちや、民族衣装をきた人々、数種類のスープを煮込む大なべ、軒を連ねる家の壁画でほほえむ人々、ヴァイオリンを模したお洒落なまな板をうるお店、生の、すこししょっぱいソーセージを売るお店、皮のバック、木のチャーム、細かな装飾のナイフ･･･。なによりあの磔台が楽しかったです！住田先輩・まいさん・宇津木さん・私でいっちょ磔になってみました。前述の通り家々にかかれた壁画もかわいいものが多かったです。これは壁画師という職業の人が描いているものらしいです。壁画師さんは壁画専門の絵描きなので、逆にキャンバスなどには、小さすぎて絵がかけないとか。しかしこんな大きなキャンバスに絵がかけて、長くのこる絵をかけるとは、壁画師素敵すぎます。ぜひ壁画師になりたい。
ところで 525 年祭の入り口に民族衣装を着たまんまるのおじさんたちがいました。樵？っぽかんじで、なんかそこだけさらに昔という雰囲気でした。そしておじさんがかわいい。でかい。

なんだかんだいい派遣でした。日本で出来なかった様々なことを経験することが出来て、一気に自分の視野が拡がった感じです。たくさんの素敵なものを見て、目も肥えました。またドイツに行きたいです。

ドイツ！ドイツ！ヤスミン！

宇津木　桃子

　初めての海外旅行でしかもホームステイ！信じられませんでした！
それに、自分の英語が通じるのだろうかとかいろいろ不安でした。
初めての飛行機はドキドキでした！あの飛行機に乗ってた人の中で一番興奮してたのはおそらく私です(^_^;)笑
離陸の時はふわってなって気圧のせいで耳がキーンとなりました。何かのアトラクションに乗ってるみたいでした！！
そして１２時間のフライト・・・
つらかったです。やることもないしあまり寝れないし・・・
と思っていたら意外と寝てました(^^)でもながかったです。一番つらかったかもしれないですね。
着陸の時もおそらく一番ノリにノッてました！一瞬無重力みたいになって、ジェットコースターに乗ってる感じでした。一気に気圧がさがるので離陸の時より耳が痛かったです。

空港に降りると日本より涼しくて「おお！涼しいぞ！！」と一人で感動しました(^.^)笑

バスで初めてのアウトバーン！みんなすごく速い！どんどん追い越されてく！
のちに２１０㌔でとばすことになりましたが(^_^;)
210㌔は前以外何も見えません！ぶつかったら死んじゃいますね(^o^;)

ミュンヘンを横目に見ながらヴォ市につくとみなさん温かく迎えてくれて、ここならやっていけそうだ！と思いました(^^)♪

ヘレンキームゼーの前でとった写真！きれいなところだった！
なんだか不思議の国に迷い込んだみたいに家や、街並みが可愛くて、毎日毎日すごく楽しくて充実してあっという間に終わってしまいました。
お別れ会ではお父さんが、家族だと思っていると言ってくれたのがとてもうれしくていっぱい泣いてしまいました(^^;)

帰国後もメールをしたり、文通をしたりしてコミュニケーションを続けています。これからもずっと続けていきたいです。

今回、ヴォ市に行けたこと、この企画にかかわってくれていた方々に感謝しています！
この企画に応募しなかったら外国にもう一つ家族を作ることもできなかったし、派遣団との思い出も作れませんでした。本当に楽しかったし、初めての海外でカルチャーショックもたくさん受けてきました！
一番感謝しなきゃいけないのはヤスミンですね。いつもうるさかったけどあのフレンドリー感がなければちょっと辛かったかもしれません（^_^;)
Ｄａｎｋｅ！Ｄａｎｋｅ！Ｄａｎｋｅ！＼(^o^)／

Die Brücke 交流の架け橋

和田　千寿

日本では猛暑となった今夏、２０１２年８月１日、私達は成田空港を出発。１２時間のフライトは長く感じられましたがミュンヘン空港で私達を待っていたのは涼しいヨーロッパの風と温かいヴォ市の方々でした。

私は約８年前から姉妹都市交流のお手伝いをさせていただいています。当時はドイツ語がほんの少ししかできずドイツという国に何のゆかりもありませんでした。しかし２００３年頃からドイツ語を勉強し始め２００４年の夏、ドイツ旅行の際にヴォ市を訪問したことからすべては始まったのです。
それから毎秋、ヴォ市からの訪問団来市の際にお手伝いさせていただき今ではそれがすっかり私の大切な年中行事の一つとなっています。
８年の時を経て微力ながら通訳としての仕事をいただき今夏はついに青少年の皆さんと一緒に公式訪問を果たす事が出来たのです。本当にそれは長年の願いが叶った瞬間でした。

今回の訪問で一番楽しみにしていた事は今まで入間市を訪問してくださったヴォ市の方々との再会でした。
連日のように青少年とのプログラムが終了した後、個人的にお宅にご招待くださったりどこかへ連れて行ってくださったりと本当にお世話になりました。行く先々で嬉しいサプライズが用意されていました。
実は入間市ではヴォ市からの訪問団受け入れに当たり市の職員の方々はもちろん私達、通訳も数か月前から打ち合わせや観光先の下調べ、そしてドイツ語の勉強会を何度も重ねるのです。実際のアテンドの場でも少しでも喜んでいただきたいとの思いで臨んでいます。こんなきめ細かさはドイツ人にはな

いだろうと思っていましたが今回の訪問で驚かされました。
市長秘書のクラウディアさんをはじめ多くの方が実にきめ細かくお世話してくださったのです。これも長年の姉妹都市交流で培われた成果なのでしょう。

９日間の間、夕方に一時間ほどの夕立にみまわれた日が２，３日ありましたがそれ以外は美しく爽やかなヨーロッパの夏を満喫できたように思います。
連日のプログラムも青少年達の学習テーマに則し大変意義あるものでした。
農場見学、幼稚園見学、リサイクリング施設訪問ではドイツ人の妥協を許さぬ綿密さと合理的な気質が確認できたように思います。
ヘレンキームゼー城とミュンヘン観光ではヨーロッパの長い歴史やため息が出るほど美しい文化を肌で感じる事ができました。

そしてブロンベルクとパートナッハ峡谷へのハイキングでは壮大な自然の中に身を置き爽やかな空気や溢れるほどの緑を満喫できました。普段歩き慣れない私はヘトヘトになってしまいましたが……（泣）。
忘れられないのはブロンベルクへ行った日の事です。リフトで山に登り昼食を終えた頃、雨が降り出し歩いて下山することになったのです。
突然豪雨となり雷がとどろき、空がピカピカしだしました。山道で転びながらもドイツの青少年とお互いに助け合いながら無事に下山できた時は本当にほっとしました。しかし、これを通して入間の青少年同士、また日本とドイツの青少年の絆が深まったように感じました。
下山して帰路に着くとヴォ市では雨は降っていないとのこと。予定通り晝間さんと私はビアガーデンへ。ここでもサプライズ、懐かしい顔、顔。感激の再会。５年前に個人的にヴォ市の小学校の英語の授業を視察させていただいた折、学校の手配をしてくださり泊めてくださったホストマザーのゲルディーさんの姿もそこにありました。私は彼女と今は亡き彼女のご主人をドイツのママ、パパと呼んでいます。去年の１１月にご主人が亡くなり今でも残念で仕方ありません。しかし今回、お墓参りをしたいという願いが叶ったこと

には感謝です。
今回、公務で訪問した訳ですがどこへ行っても懐かしい顔に再会でき温かく素朴なおもてなしを受け、まるで夏休みに親戚のところを訪れた様な気分でした。
姉妹都市提携から２５年、ヴォ市と入間市とのこれまでの交流の中で深められた絆があればこそこんなにも近しく感じる事ができるのだと思います。

お別れ会は本当に素晴らしかったと思います。
青少年達が抹茶をたてて全員にお出ししました。たてるところも解説付きで披露したのでドイツ人達は興味深々で見入っていました。“ぶん、ぶん、ぶん”の歌を一回目を日本語で二回目をドイツ語でそして三回目を全員でドイツ語で歌う事ができたのです。　会場が一つになれた感じがしました。
最後に”ソーラン節“の踊りを披露。迫力ある素晴らしいパフォーマンスとなりドイツ側から絶賛の声が。。。。
アイディア自体も素晴らしかったけれど青少年達が心を一つにしてお別れ会を成し遂げた事に私は感動しました。　本当にいい宴となりました。

世界では今日も尚、戦争や紛争が絶えないけれど人間と人間が互いに相手を思いやり理解する努力によって平和への一歩があるのだと信じたい。
ヴォ市と入間市は遠く離れていようと文字通り姉妹のように互いを大切にしその絆は深い。青少年の皆さんには今回の異文化体験訪問団事業を通して是非これからも交流の架け橋となっていただきたいと思います。
私もまだまだドイツ語の勉強が必要ですが今回の経験を生かしこれからも姉妹都市交流に精一杯お手伝いさせていただきたいと思っています。

最後に両市長を始め今回の派遣事業に関係するすべての方々に心より感謝申し上げます。素晴らしいひと夏の思い出をありがとうございました。

青少年異文化体験訪問団派遣事業を終えて

畫間　拓哉

姉妹都市ドイツ・ヴォルフラーツハウゼン市へ「青少年異文化体験訪問団派遣事業」として１９９６年（平成８年）に入間市の青少年が初めて訪問してから今回で９回目となりました。

この派遣事業は、平成２４年度中に１６歳から２２歳になる青少年を対象に、①人生の中でも多感な時期に異文化を体験し理解するとともに互いを認め合う心を育むこと。②姉妹都市関係の発展に寄与すること。③この事業で得た経験を家族・友人・学校・地域社会等へ還元すること。この３点を目的として実施しました。

青少年事業は、原則として隔年で派遣・受入れをしている事業であります。２１年度・２２年度と２年連続でヴォ市への派遣となり、昨年度はヴォ市の青少年を受入れる予定でありましたが震災による放射能の影響も懸念し、受入れは中止となりました。

今回も多数の応募者の中から作文及び英語（ドイツ語）での面接の選考により、入間市の８名が代表者として決定されました。メンバーが初めて顔を合わせたのは、市国際交流協会の総会でした。ここでは、「派遣に向けての抱負」を大勢の人前で一人ずつ堂々と発表することが出来ました。

ヴォルフラーツハウゼン市へ到着して私の目を一番引いたのは、何よりも緑が多く、その自然の美しさに驚かされました。入間市に似ている印象を受けました。出発前の天気予報では訪問期間の半分以上が雨との予報でしたが、天候にも恵まれ陽が差すと気温が一気に上昇する一方で湿度は低く過ごしやすい気候でした。

青少年は各々のホストファミリー宅にホームステイをし、生活や食習慣も異なるなか概ね英語で積極的にコミュニケーションを取り、予想以上にヴォ市市民と交流を図るとともに異文化を体験して来ることが出来ました。

ヴォルフラーツハウゼン市側には、派遣団の意向を最大限に取り入れたプログラムを作成していただき、ホームステイ先では両市民の交流が深められたと同時に、家族の一員となれたようでした。個々の学習テーマも事前に設定し、明確な目的を持って訪問したことにより、しっかりと学習にも取組むことができ、異文化体験を存分に楽しむことが出来ました。

また、今回は姉妹都市提携 25 周年の節目の年に訪問させていただいき、ヴォ市市民から熱い歓迎を受ました。お互いに積極的な交流が図れ、目的の一つである友好関係の発展に努めることができたと考えております。

私個人としましても、20 年ぶりのヨーロッパであり、ドイツは初めての訪問でした。4 月に自治文化課へ異動して 3 ヶ月でヴォ市派遣団の訪問団長と言うこともあり戸惑いや不安もありましたが、まずは全員が無事に帰国でき、更に青少年と共に異文化を体験し、ヴォ市の方々と深い交流が図れたことは忘れらない思い出となりました。

最後になりましたが、ヴォルフラーツハウゼン市のご協力及び市と入間市国際交流協会の理解と協力のもと、その他大勢の方々にご支援を頂き、本派遣事業が無事終了できたことに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

アルバム

wind sportswear

Allianz
HOTEL

【学習の記録】

ルートヴィヒ２世が造ったお城

寺岡　優美

私は、大学で様々な国の文化について専攻しているので、建築の点からドイツについて調べようと考えた。その中でもバイエルン王ルートヴィヒ２世が建てたお城に興味があり、滞在中に３つのお城を見学することができたので、これらについて述べる。

まず１つ目は、最も有名なノイシュヴァンシュタイン城だ。このお城は、19世紀に建てられたお城で、ルートヴィヒ２世が中世騎士道への強い憧れを具現化しようとこのお城を建てた。バイエルン地方で最も有名な観光名所であり、観光客でにぎわっていた。中を見学するためには、かなり待たなければいけないので、今回は外観だけの見学となったが、その美しさは目を見張るものがあった。現在、正面から向かって右側を修復作業中ということで、完全な姿は見られなかったが、白い建物がバイエルンの青空に生えて本当に美しかった。

２つ目は、ヘレンキームゼー城である。このお城はルートヴィヒが建てた中で最も大きく、彼が憧れていたフランスのルイ 14 世への記念碑的役割のお城といえる。その証拠に城内の装飾には、ルイ 14 世に関する彫刻や絵画がたくさん飾られていた。また、ルイ 14 世が建てたヴェルサイユ宮殿にある「鏡の間」を模したものが造られている。技術的にはルイ 14 世の頃より進んでいたので、鏡の間の広さなどはこちらの方が勝っている。内装は金が基調でマイセンの磁器の花瓶なども見受けられ、本当に豪華絢爛であった。しかし、豪華なばかりで王の浴室は深さが３メートルもあるなど、あまり実用性は感じられなかった。また、このお城は外観や内装も含めて「左右対称」であることが感じられた。例えば、部屋の入口と出口の両方に似たような像を置いたり、王の寝室の両側の壁に絵画を置いたりなど、いたる所に見受けられた。さらにこのお城は湖に浮かぶ島の上に建てられており、王の別荘地として位置づけられていた。実際、９年かけて建てられたにも関わらず、王の滞在は 10 日にも満たなかったようだ。ドイツの人々が私を案内してくれている時に「ルートヴィヒ２世は、浪費しすぎだ」という類のことを口々に言っていたが、それも納得できる。

３つ目はリンダーホフ城だ。この城は、フランスのトリアノン宮殿を参考にして造られた。しかし、ヘレンキームゼー城とは違い、既存の建物を完全に模したわけではなく、ルネサンス様式の城にバロック様式を加味するなど、オリジナルの要素も見受けられる。この城は、他の城に比べると小規模だが、王の

【学習の記録】

滞在期間は１番長かったようだ。金色の像がたくさん置かれ綺麗に手入れされた庭が印象的で、王が祈るための建物や、王がオペラを鑑賞するための小さな劇場などが隣接しており、王がここで生活していたことが感じられた。また、内装はロココ様式で、こちらも非常に豪華絢爛だった。

左上ノイシュヴァンシュタイン城、右上ヘレンキームゼー城、下リンダーホフ城

　これらの３つのお城を見学し、自分の目で見ることができ、本当によかった。どのお城もメンテナンスが丁寧に施されていて、城そのものだけでなく、庭やその周りの建物まで綺麗にしてあって、ドイツの人々が敬意を持ってこれらの歴史的建造物を継承していっている様子が伝わってきた。また、どのお城も自然との調和がうまく取れていて、山の中にあったり、湖が一望できたり王が自然を愛する心が伝わった。自然を大切にしながら歴史的建造物を守っていく姿は、我々日本人も見習わなければならないと感じた。

【学習の記録】

ドイツの農業

住田　快登

今回、僕は大学で農業を専攻していることもあり農業を学習テーマに置きました。実際に農家へ見学も出来てとても貴重な体験をさせてもらったと同時に、日本もドイツの農業政策に見習う点があることを肌で感じられました。

●グリーンツーリズム●
昨今、日本でも農村の活性化を目指し、グリーンツーリズムが謳われています。グリーンツーリズムとは、農業・農村・農家がベースとなって都市に住む人が余暇を利用して農村に滞在し、農作業の体験や農業への関心や理解を高めるための活動です。日本とドイツは農業を取り巻く環境が似通っていることもあり、ドイツを参考にグリーンツーリズムを推し進めています。

僕が感じたことは
① 日本は戦後急速に近代農業が推し進められてしまった
② 日本では利用できるだけの余暇がないのではないか
という２点です。

日本では戦後のわずか数十年で近代農業が推し進められたり、工業化が進んだ結果、農村景観も自然も大きく損なわれてしまいました。一方、ドイツでは日本と同じように工業(特に自動車産業)が盛んにも関わらず農村景観も自然もたくさん残っていました。これはバイエルン州が単に農村地域だったからかもしれませんが、ドイツでは全体的に自然が多かったように感じます。
このことは政府の政策も大きくかかわります。ドイツでは道路を舗装する際などにその分の緑を植えなくてはならないなどの決まりもあります。

次に、日本ではお盆などの短い期間しか余暇がありません。これでは家族と一緒に農家に滞在するのは難しいかと思います。ドイツや他のヨーロッパ諸国の休暇がどの程度あるのかは分かりませんが、そもそも農業に対する関心の度合いに日本よりも強いものがあるように感じます。
また、農村近くの学校はもちろん都市部の学校でさえ農業体験が盛んに行われています。こういったことからもドイツやヨーロッパ諸国の農業に対する関心

の高さが伺えると思います。
●国としての取り組み・個人の取り組み●
ドイツや EU 圏内ではグリーンツーリズムへの財政支援が整っています。小さなものは市の財政支援から州、国さらには EU の財政支援まであります。また、グリーンツーリズムがマーケティングとしてしっかりと根付いているため州によるカタログの政策や各個人の農家によるホームページの作成なども行われ、自治体に頼らず、能動的にグリーンツーリズムが行われています。

これが宿泊施設。新しい分きれいですが、農村の景観を壊さないようなドイツの伝統的なお家と同じようなつくりになっています。

●感想●
今回、この事業に参加させていただいて実際に農家を見学できたことはとても貴重な体験となりました。
ドイツは自然が多く、農業に対する姿勢がまだまだ日本は及ばないなと感じていましたが、日本には四季があり、それをいくらでも活かせることも感じることが出来ました。この経験をこれからの学生生活で活かしていきたいと思います。

【学習の記録】

お世話になった農家の方々と一枚

【学習の記録】

Ｊポップカルチャーのパワー

齋藤　麻衣

経済産業省は平成 23 年より、世界が共感する「クール・ジャパン」の海外進出促進、クリエイティブ産業の育成や国内外への発信を推進しています。そのなかでもとくに、ポップカルチャー分野の比重は少なくなく、今後の基幹産業としての活躍が見込まれています。そこで今回、実際に遠く離れたドイツの地で日本のポップカルチャーがどの程度浸透、普及しているのかをこの目で見て確かめてくるというのが私のテーマでした。

実際にドイツの人々と交流してみてわかったことは、ドイツではまだ日本のまんが・アニメが文化として普及しておらず、一部のファンたちによって支持されているにすぎないということです。たとえば、日本ではスタジオジブリの作品は、いわゆる「オタク」だけでなく子供から大人までが日常的に楽しむものという認識がありますが、ドイツではまだまだ知名度が低く、一般の特別日本に興味のない人たちには存在すら知られていないように感じました。しかしその一方で、日本のポップカルチャーが大好きで日本にとても興味を持ってくれている人がいたことも事実です。今回の派遣事業で私は、二人のドイツ人「オタク」に出会うことができました。

ひとりめは、快登のホストファミリーだったクリスです。彼は特にブリーチ、鋼の錬金術師などが大好きで、たくさんの日本アニメを見るようになったそうです。懐かしいアニメの話題で盛り上がったり、アニメソングを一緒に歌ったりすることでたくさんのコミュニケーションをとることができました。

【学習の記録】

【クリスのコレクションの一部】

ふたりめは、陽葉ちゃんのホストファミリーだったキャシーです。彼女はDNANGEL という漫画がきっかけで日本文化に出会い、大学で日本語を学んだそうです。彼女は現在日本のロックバンド、ラルク・アン・シエルにはまっていて、先日の世界ツアーパリ公演にも行ってきたそうです。また日本にも来たことがあり、温泉はとても良かったと言っていました。

【ラルクパリ公演のライブ T シャツ】

商業面でみれば、日本のポップカルチャーはまだまだ普及が進んでいるとはいえない状況でしたが、今回私が痛感したのは、文化が持つ力とは実に大きいということです。お互いが母国語でない言語を使う不自由な状況で会話するとき、日本のポップカルチャーはとても大きな役割を担ってくれました。ポップカルチャーは日本への興味のきっかけとなり、友好を深めていく一助となる力を持つということを身を持って体験でき、大きな収穫となりました。

【学習の記録】

ドイツの食文化

酒井　佑果

私の学習テーマはドイツの食文化についてです。私が実際にドイツで食べたものを中心にドイツで学んだことを書きたいと思います。

これは、バイエルン地方の料理、zwetschgenknodel です。ヨーグルト（？）や小麦粉などで作った生地でプラムを包んでゆでたものに、砂糖とシナモンをかけて食べました。

日本人からしたらおやつのように感じますが、ホストファミリーの家では夜ご飯として食べました。

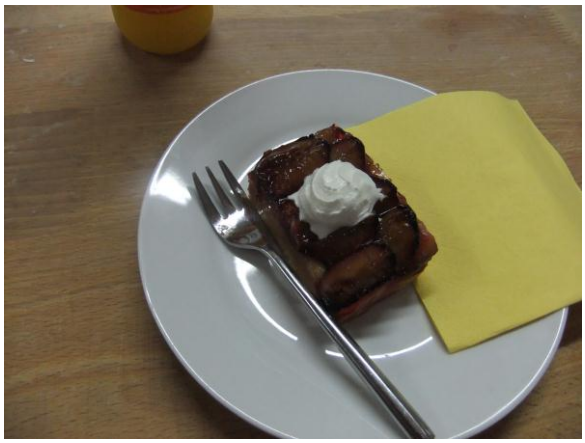
甘酸っぱくておいしかったです。

4 日目の山登りの際にレストランで食べた、白ソーセージ（ヴァイスヴルスト）です。バイエルン州の伝統的なソーセージで、表面の皮をむいたあと、甘いマスタードをつけて食べます。プレッツェルやビールと一緒に食べるのが一般的だそうです。

このソーセージの歴史には諸説あります。1857 年の 2 月 22 日、ミュンヘンのマリエン広場に面したレストランで、カーニバルの賑わいでたくさんのお客さんが来たために、普段出している羊の腸につめたソーセージが品切れになってしまい、苦し紛れに豚の腸に肉を詰めてお客さんに出した、ということから偶然生まれたという伝説や、フランスでは 14 世紀にすでにこのようなソーセージが存在していたという説などがあるようです。

【学習の記録】

８ 日目には、ブルガー・ベーカリーでプレッツェル作りも体験しました。生地は予め用意して頂いて、私たちは形成に挑戦しました。この形を作るのは意外に難しかったです。
プレッツェルはホストファミリーの家でも朝ご飯として出してもらったりしました。塩がかかっている、固めのパンです。ドイツのパンは固いものが多くて、「日本人は柔らかくて白いパン（食パン）をよく食べるんでしょ？固いパンで大丈夫？」とホストファミリーに気遣ってもらったこともありました。



同じくベーカリーで出してもらったプラムのケーキです。おいしかったです！
前に書いたように、ホストファミリーの家でもプラムを食べたので、ドイツではプラムがポピュラーなのかな、という印象をもちました。

日本の家庭料理は、いろんな種類のおかずを少しずつ食べますが、ドイツの食事は一種類の料理をたくさん食べるという印象でした。また、今回は外食する機会も多かったのですが、どこに行っても一人分の量が多く、やはり日本人とは体格も違うし、ドイツの人はたくさん食べるのだなと思いました。
私は初めての海外渡航だったので、長期間和食から離れるというのも初めてでしたが、改めて食文化というのはその国の人々に合うようになっているのだと感じました。ドイツの食事はとてもおいしかったですが、最後の方は和食も恋しくなりました。

【学習の記録】

ドイツで学んだ環境意識

小野 真理子

私がこの派遣事業に行くにあたって設定した学習テーマは「ドイツの環境を守る為の取り組みについて」です。「環境大国」であるドイツには、自然環境への配慮という面で、どのような制度があるのだろう。それが日常生活にどう反映しているのだろう。そんな疑問から、リサイクルやゴミについて調べました。

◆ゴミコンテナについて

これはゴミ収集用の大きなゴミ箱のことです。ドイツでは、住居や町中にあるゴミコンテナに持っていって捨てます。コンテナは入れるゴミによって大きく３種類に分かれます。

①資源ゴミ用コンテナ

グリーンマークの付いたゴミや、分別出来る資源ゴミを捨てます。

＊グリーンマークとは、リターナブル容器を除くほとんど全ての包装容器をカバーするリサイクルマークのことです。

ゴミによってそれぞれコンテナが異なります。

②家庭ゴミ用コンテナ

複数の素材を混ぜて作られているゴミや、分別不可能なゴミを捨てます。

③生ゴミ用のコンテナ

台所から出る生ゴミや、庭から出る植物性ゴミを捨てます。

種類が沢山あるゴミコンテナ

【学習の記録】

◆リサイクル工場 WGV について

８日目に③生ゴミ用のコンテナのゴミを土にする工場を見学しました。

まず、その過程を順を追って説明したいと思います。

①異物の除去

ゴミをベルトコンベアにのせ、混ざっているプラスチックを人の手で取り除きます。次に、磁石を用いて金属を手動で除きます。この作業する為の小さな部屋（下写真左）は、ゴミからガスが発生する為、空気の入れ替えが必須です。

また高い人件費は、ゴミ処理料金として、一般家庭から徴収されています。利益が目的の会社ではないので、儲けナシで運営しているそうです。

作業部屋

ベルトコンベアと粉砕機

②粉砕・発酵・殺菌

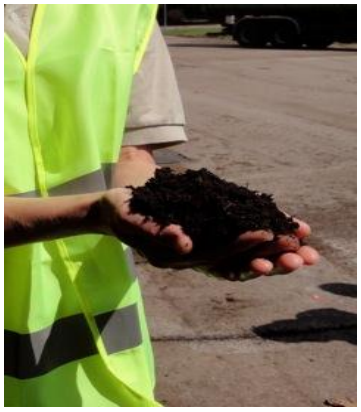
より分解が進んで早く土に再生する為に、ゴミを粉砕します。（上写真右）ガレージに入れて閉じ込めて発酵させ、その時にでる熱で殺菌します。この熱は、殺菌以外にも暖房の熱源やガス発電での利用を計画中です。

③ふるいにかける

人の手で見逃したプラスチックを除く為に、ふるいにかけます。これによって、水、空気、温度の条件が揃い、菌が活発になります。そして自然の力で、腐葉土になります。もう臭くなく、まるで森の土のような豊かな匂いがします。（下写真左右）ちなみに出来た土は肥料として良すぎる為、痩せた土に１／３だけ混ぜると良いのだそうです。

【学習の記録】

（下写真左右）ちなみに出来た土は肥料として良すぎる為、痩せた土に１／３だけ混ぜると良いのだそうです。



完成した腐葉土

微生物の力で、ゴミを土に再生する。この考え方は、日本には少ないものです。以前、山梨のスーパー横に、「生ゴミ処理機」があるのを見て驚きましたが、そのようなものはあまり見かけないですし、家庭で出来る生ゴミ処理は、不衛生という欠点があります。一方 WGV の施設は、公的な補助金を用いて約４５億円相当で造られました。これは、この地区の地下水の利用者が多いのを考慮して、地下水に絶対に影響しないようにしているからです。このことからでも、ドイツがいかに環境に対して気を配っているかが分かります。

また、WGV では、再生した土を様々な種類の肥料として販売しています。（下写真左）これは、ゴミ由来のものを利用してもらうことで、市民の環境への意識を高めるのに役立っていると思いました。みどりが多く、ゴミのないヴォ市の風景。ヴォ市の森林で見た、森のことを楽しく知ることのできる沢山の看板。（下写真右）全てがきっと高い環境意識からきているのでしょう。

写真　花の肥料の販売（看板）

森の看板と通訳のタカマさん

【学習の記録】

日本でも、ゴミについての取り組みは沢山あります。実際に、入間クリーンセンターを訪れたこともあります。けれどこの学習を通して、まだ改善出来るところがあると感じました。分別方法である可燃、不燃、資源の大雑把な括り方にも違和感を覚えますが、身近なことでできるのは、やはり個人の分別です。再生は、分別ありきなのです。これは調べてみて浮きあがった両国共通の問題点です。

地域社会の小さなコミュニティーの中で、互いに分別の意識を高め合う。「みんなで一緒に分別しよう」。言葉にしてみれば単純なことですが、個人の意識こそが、環境を守ることのカギだと実感しました。

ヴ゛ォ市と入間市の共通点の一つに、「みどりが多い」というのがあります。みどりとは、木々もそうですが、植木鉢に咲く花々など、街の美化活動・緑化活動も入ると私は思っています。「みどりが多い」のは、市民による細やかな手入れの賜物なのです。また、私はこの派遣事業に参加して、様々な経験を通してまた少し成長したなと思えました。なので、この貴重な経験を、出来るだけ沢山の人に体験してもらいたいです。

このすばらしい姉妹都市交流が、そして美しい両市の街並が、いつまでも続くことを願っています。

【学習の記録】

学校教育について

石山　陽葉

残念ながら、学校へ見学をすることが出来なかったため、通訳の高間さんから話を聞くことが出来ました。

ドイツは少し特殊な教育制度があり、小・中・高は全て同じ地域に備えられています。これは、子供たちが、わざわざ電車や車で遠い学校まで通学することが無い様にという配慮からなっています。　そのため、子供達は高校生までは、ずっと同じ人と学生生活を送ることになっています。

ドイツでは、中学校を卒業して働く人と、高校を卒業して大学に行く人の二種類に分かれます。

どの道に進むにしても、優秀な成績を修めなければなりませんが、この二種類の違いを説明しようと思います。

まず、中卒で働く人たちについて。　例えば、自分の家が農家だとして、将来は家を継がなければならない時には、この道を選択します。

しかし、学校を卒業したからといって、すぐに就職が出来るわけではなく、農家として働くための勉強をして、国家試験を受けなければなりません。そのため、試験を受けるために、ある程度の研修を自分の牧場でするか、あるいは別な場所で研修をして、国家試験を受けて受かって初めて農家で働くことが出来るようになります。

もちろん、家が農家でなくても、自分が農家で働くことを望めば、同じやり方で、働くことが出来ます。

【学習の記録】

　次に、高校を卒業して大学へ行く人について。　こちらも、高校を出たからと言って、ただ試験を受けて大学へ行けるというわけではありません。
さらに、インターンシップをやって、そこで優秀な成績を修めなければ、大学に行くことは出来ません。
　このように、大学へ行くにしても、就職をするにしても、そこへ行くための過程をクリアーしなくてはならないということです。
　また、このように自分の進路を決めるには、早めにしなければいけないことなので、ドイツの子供達は自分の進路に向かって、小さいうちから熱心に学習をしなければならないという事でもあります。
　しかし、この試みを、「こんなに早くから子供を縛り付けて良いのか。」
という批判的な考えを持つ人もいるそうです。
　日本人からしてみれば、考えられないですよね。その点から考えてみると、日本は他の国よりも教育が少し甘めなのではないかと私は思います。
早いうちから自分の進路を考えることは、自分の将来をじっくり考える時間があるということなので、日本の教育も、それにならって少し変えても良いのかな？　とおもいました。

【学習の記録】

ドイツの森への姿勢と取り組み

新井田　ひなの

　自然を大事にするドイツで、森に対してどんなことをしているのかについて調べてきました。
ドイツの森で日本と違うと思ったのは、ヴォルフラーツハウゼンのような地方市の森でも、必ずその森を知るためのボードを設置することが義務付けられている、ということです。ボードの近くには実際に自分で森の仕組みや歴史を体験できるアトラクションもあり、より森に興味を持つことが出来る仕組みになっています。今回はその一部をご紹介します。

① 木が何に利用されているか
これは木のどんな部分が何に利用されているのかを表したボードです。幹の部分はもちろん家や資材などさまざまな事に利用されますが、おもしろいのは枝などの細かい部分も残らず利用されているということです。例えば、

１、ペレッツ→薪にする。細かいので水やオイルのように暖炉に注げる。
２、木屑→庭に撒いて飼料にする。
３、木綿→床板に利用する。ドイツ人はビニールの床板を嫌うので、よくこれが利用される。
ほかに、ゴムに木屑をまぜてタイヤを作ったり、コルクやまき作ったりもする。

② 地面の素材の違いを裸足で感じる

【学習の記録】

苔や木屑、砂、泥など、いろんな素材で作られた地面が設置されています。一番痛かったのは大きな石がころがっているところでした。苔は兎に角柔らかかったです。落ち葉が特に足にフィットしてよかったです。
③ 木の長さ・太さによる音の違い

まさに木琴！横に楽譜もはってあり、演奏が出来るようになっています。

④ 森の中の憩いの小屋

小屋、ベンチ、テーブルなどにはここの木が利用されています。本にはこの森に関する童話が書かれていて、子供でも楽しめるようになっています。また夜になると若者たちがここでパーティを開いたりもするようです。ただ、ごみが問題だとかで・・・。

ほかにも、木の年輪からわかるドイツの歴史、木の伝音性、木の種類など、色々なアトラクションが設置されていました。
他にも、山の木が高くなりすぎると倒れたときにふもとの家を壊してしまうので、２，３、年毎に伐採したり、森の中に劇場を作ったり、教会があったり、本当にドイツ人は森と密接に生きているんだな、と感じました。

【学習の記録】

食文化と幼児教育について

宇津木　桃子

　事前学習では、ジャガイモやパンを主食とし、手間をかけず簡単な料理が特徴的ということでしたが、家庭料理の基本は肉＋ジャガイモのようなもので、朝ご飯は毎日パンでした。パンの種類は黒パンと白パンで黒パンはやや酸味があり、
白パンは食パンを丸くして少し硬くしたようなものでした。

昼食はほとんどレストランでしたが、基本は変わらず肉＋ジャガイモでした。
ホストファミリーとの一日の日に食べた昼食はお母さんの手作りケーキでした。
お昼にケーキを作る時点で手間はかかっているなと思いました。

夕食は、肉のみでした。生野菜は出ません。また、夕食にパーティーやビアガーデンに行くなどご飯を食べるときは楽しく大勢で食べるのがバーバリアン流なのだそうです。

実際に行ってみると、事前学習とは異なる結果になりました。

ドイツでは環境のためにベジタリアンになる人が多いです。私がお世話になった家はベジタリアンではなかったので野菜は一切食べず、肉（主に豚と鶏肉）をＢＢＱで食べました。

レストランではサラダを頼むと大盛りで鶏肉の焼いたものがついてきます。

水は、炭酸水が主流で炭酸なしは言わないと出てきません。日本では炭酸水を飲む習慣がないので、炭酸なしのほうが飲みやすかったです。

ドイツといえばビールとプレッツェルですが、ビールは水より安かったです。
プレッツェルを作るのは、簡単そうに見えてすごく難しかったです。
ドイツではビールのおつまみとしてプレッツェルを食べるそうです。

【学習の記録】

～幼児教育～

　事前学習で学んでいったとおり、シュタイナー教育を行っていました。
日本でシュタイナー教育を行っている幼稚園は私の通っていたあんず幼稚園で行っていました。

シュタイナー教育とは、陶器のお皿を使いご飯を食べたり、木のおもちゃを使ったり、自分で何かを作ることや自然の中で自由にのびのびと教育する事です。
この教育法はドイツが発信国で、世界中で浸透率が低い国は日本です。
私はこの教育法がもっと日本に浸透するといいと思います。

ドイツの多くの幼稚園はシュタイナー教育を行っており、そのおかげで子供たちの自然に対する気持ちや、何かを作ったりする好奇心が強いそうです。

異文化体験訪問団派遣事業に参加される方々へ

○　寺岡　優美

まず最初に、ドイツでの日々は一生の思い出になること間違いありません！言葉の面で不安に感じている人もいると思いますが、私の最初はドイツ語もほとんど知らず、英語にも自信がありませんでした。それでもドイツの人々はとても優しいので、一生懸命私の言葉に耳を傾けてくれて、問題なくコミュニケーションできました。また、ドイツ語と日本語を教え合うことで距離が縮まりました。大事なのは、何かを伝えようとする心だと、身を持って体験できるいい機会だと思います。

○　住田　快登

せっかく入間市に住んでいるのだからこの派遣事業に参加しないともったいない！ドイツでは日本では味わえないであろう様々な経験をすることができました。また、言葉の違いや文化の違いはあれど根本的なことは分かち合えます！

そういった面で草の根の国際交流ができると思います。ドイツに行きドイツの素晴らしさを知ると同時に日本の素晴らしさ、入間の素晴らしさを再度確認できます！最後に「おいしい」という日本語を教えてあげてください。そして入間市のみなさんはドイツ語の「おいしい」を教えてもらってください！使ってもらうととてもうれしいし、使うととても喜ばれますよ！

○　齋藤　麻衣

私がこの事業に応募したのは、ただなんとなく「ドイツ行ってみたいなぁ」という気持ちからでした。なので、立派な志は必要ありません。とにかく全力で楽しむ心さえあれば万事 OK です！英語に自信がなくても、通訳の方もフォローしてくれますし、現地の人も一生懸命理解しようとしてくれます。案外なんとかなりますのでそこは心配ありません。ドイツでの日々はあっという間なので後悔のないよう楽しんできてください。

○　酒井　佑果

最初は言葉や食事に慣れなくて、不安に感じるかもしれません。でも、ホストファミリーやヴォ市の人はとても親切だし、派遣団員の仲間もいるし、その不安は絶対に乗り越えられるということを忘れないでください！慣れてからは本当にあっという間です。思う存分楽しんできてください！あと、想像以上にお土産はかさばるので、持っていく荷物は最小限にして、空きをつくっておいた方が良いです。（笑）

○　小野真理子
バイエルンは本当にいいところですよ！　夏は涼しく、人柄はあたたかく、 10 日間は飛ぶようにすぎて行きます。びっくりするくらい。
一番大事だと感じたのは、自分のやりたいことや考えをしっかり持っていくことですね。今年の報告書を読んだあなたも、きっとやりたいことが見つかるはず。「なにがしたい！」とはっきり言える人は、どんな人とも仲良くなれると思います。一日一日を大切に、充実した 10 日を存分に楽しんで下さい！
きっと一生の大切な宝物ができますよ。是非チャレンジして下さいね。

○　石山　陽葉
私にとってこのドイツ訪問はとても意味のあるものでした。勿論、この異文化体験訪問団に選ばれた時にまず心配したことは語学力が追いついていけるかどうかでした。　きっとそれは、他のメンバーも感じた事だと思いますし、これから参加を考えている皆さんも同じでしょう。しかし、そんなことは心配ありません。大切なのは何よりも、自分で自分の意思を相手に伝えようとする気持ちです。たとえ、自分の英語が通じなくても、相手は雰囲気で分かってくれますし、友達も助けてくれます。
あとは、笑顔を忘れずに！！
百聞は一見にしかずです。怖がらずにまずはチャレンジしてみてください！

○　新井田　ひなの
ドイツはほんにいいところでした。月並みですが、日本では得られないことを沢山得ることが出来ます。コミュニケーションはハートがあれば大丈夫！・・・ちなみに、日本の味が恋しくなったときのために、干し梅もってっとくといいですよ！

○　宇津木　桃子
出国する直前になって自分の英語が通じるのだろうかとか、ホームステイに緊張したりしてすごく不安でした。でも、実際に行ってみると意外と大丈夫でした。あいさつとＹｅｓ／Ｎｏが言えれば大丈夫だと思います。ヴォ市の方はとってもやさしいし面白い人たちばかりです！帰国してからも、ヴォ市で出会った友達とメールをしています。母や父がホームステイ先の家に手紙を送ったりもしています。ドイツにも新しくお父さんやお母さん、家族ができたみたいです。
食べ物はボリュームがあるけどすごくおいしかったです。
文章では伝わりませんが行ってみないとわかりません！行けば毎日夢みたいで時間が過ぎるのが早く感じます！

Isar-Loisachbote 03.08.2012

JUGENDDELEGATION AUS IRUMA ZU GAST

Wenn Worte fehlen, helfen Gesten

Seit 25 Jahren gibt es die Städtepartnerschaft zwischen Wolfratshausen und Iruma. Anlässlich dieses Jubiläums wird im Herbst eine Delegation aus der Flößerstadt nach Japan reisen. Am Mittwochabend aber kam erstmal eine achtköpfige Jugendgruppe nach Wolfratshausen. Eine Woche lang lernen die Gäste Land und Leute kennen.

VON NINA DAEBEL

Konichiwa, Plößl-san: Ob die Japanerin Chizo Wada Vize-Bürgermeister Peter Plößl wirklich mit diesen Worten begrüßt hat, ist nicht bekannt. Herzlich war das Hallo bei der Ankunft der Gäste aus Iruma allemal. FOTO: SABINE HERMSDORF

Wolfratshausen – Gasteltern und Gastgeschwister sitzen schon lange vor der Ankunft der Japaner im Humplbräu. Die Tische sind mit Fähnchen geschmückt: Auf jedem steckt je ein bayerisches, ein deutsches und ein japanisches in einem Glas. Vize-Bürgermeister Peter Plößl hatte seine Japanisch-Kenntnisse aufgefrischt und übt schnell noch ein bisschen. „Mein Japanisch ist zu wenig, um in Japan überleben zu können, aber ich kann sagen, wer ich bin, woher ich komme und ob ich Hunger und Durst habe."

Kurz vor 20 Uhr fährt der Bus am Marienplatz vor. „Sie sind da", ruft jemand und alle eilen nach draußen. Man lacht, schüttelt Hände, umarmt sich. Dolmetscher Ippei Takama trägt einen Trachten-Janker. Eine Lederhose hat er noch nicht, sagt er. „Da drüben gibt's welche", sagt Bürgermeister Helmut Forster und zeigt auf die andere Straßenseite zum Trachtenmodengeschäft Fischer Pflügl. Im Humplbräu sitzt immer ein Vertreter der Gastfamilie neben seinem Schützling. Erste Kontakte werden geknüpft. Zur Jugenddelegation gehören sieben Mädchen und ein Junge, außerdem die Betreuer Takuya Hiruma und Chizo Wada.

Bürgermeister Helmut Forster begrüßt die japanischen Gäste, Dolmetscher Ippei übersetzt. „Ich hoffe, dass Sie sich bei uns wohl fühlen, sich erholen und unsere traditionelle Kultur kennen lernen", sagt der Rathauschef, der selbst bereits sieben Mal in Iruma war. Ganz besonders dankt er den Familien, die einen japanischen Jugendlichen bei sich aufnehmen. „Ohne Ihr Engagement könnte dieser Austausch nicht stattfinden – und wenn es wieder ein solch tränenreicher Abschied wird wie sonst, hat es gepasst."

Dass die Beziehungen zwischen Wolfratshausen und Iruma immer enger werden, freut Forster sehr. „Freundschaft ist nicht nur ein kostbares Geschenk, sondern auch eine dauernde Aufgabe", sagt er. Dass der deutsch-japanische Austausch fortgesetzt wird, hofft auch Hiruma, Leiter der Delegation.

Hoch die Gläser und zugeprostet

Dann heben alle ihre Gläser und prosten sich zu. „Kampai", „Zum Wohl" sagen Japaner und Deutsche im Chor. Wenig später ist der Raum wieder von Stimmengewirr erfüllt. „Hast Du Hunger?", „Wie spät ist es jetzt in Iruma?", „Wie lange hat der Flug gedauert?" Die Fragen reißen nicht ab, wo Worte fehlen, helfen Gesten. Jasmin (10), die mit ihrem Papa Larry Terwey zum Abholen gekommen ist und erst wenige englische Wörter kennt, macht es vor. Sie gestikuliert und malt. Die 15-jährige Momoko Utsugi sitzt neben ihr, nickt und lacht.

2012 年 8 月 3 日（金） ヴォルフラーツハウゼン新聞

言葉が見つからない時はジェスチャーで！

●入間からゲストとしてやって来た青少年訪問団

ヴォルフラーツハウゼン市と入間市の姉妹都市関係は 25 年前からにさかのぼる。
25 周年記念に際し秋にいかだの町から訪問団が入間を訪れる。
水曜日の晩、8 人の青少年たちがやって来た。
ゲストたちは 1 週間に渡りドイツの国、そして人々と知り合う。
ホストファミリーたちは長い間、フンプルブロイで日本人たちの到着を待ちわびている。
テーブルは国旗で飾られている。　グラスの中にバイエルン国旗とドイツ国旗と日本の国旗が入れられているのだ。　第２市長のペーター・プレッスル氏は彼の知っている日本語を思い出しすばやく少し練習した。　「私の日本語は日本で生活して行くにはまだまだ少なすぎるがそれでも自分が誰なのかどこ出身なのか空腹だとか喉が渇いているかを言うことはできる。」
20 時少し前、バスがマリエン広場に乗り付けた。　「来ましたよ。」と誰かが叫び皆、外へと急いだ。
微笑みあい、握手し抱きしめあう。通訳の高間一平氏は民族衣装のジャケットを着ていた。
民族衣装の革ズボンは持っていないと彼が言うとヘルムート・フォルスター市長が　「そこの店で売ってるよ。」と通りの向こう側のペーター・フューグルの民族衣装店を指しながら言った。フンプロブロイではホストファミリーの代表者たちがそれぞれ預かる子供たちの横に座っている。
初めての対面。　青少年訪問団は 7 人の女の子と 1 人の青年、そして引率者の晝間拓哉さんと和田千寿さんからなる。ヘルムート・フォルスター市長が日本のゲストに挨拶の言葉を述べ高間一平氏が通訳する。　「皆さんが私たちのところで気分よく元気に我々の伝統的な文化を経験し学ばれますように願っています。」　と自らも7回入間を訪問している市長が述べる。
市長は青少年たちを受け入れるホストファミリーへ心からの感謝を述べる。
「ホストファミリーの皆様の尽力がなければこの交流は成立しません。　そして涙なみだの別れを迎えるとしたら今回の交流がうまくいったということになるでしょう。」
ヴォルフラーツハウゼン市と入間市の関係がますます親密になって行くだろうことを市長は大変喜んでいる。　友好関係はただ単に高価な贈り物ではなくそこには絶え間ない使命、課題があると市長は述べた。　ヴォルフラーツハウゼン市と入間市の交流の更なる継続を訪問団長の晝間さんも願っていると述べた。　グラスを持ち上げ乾杯！
誰もがグラスを持ち上げ乾杯しあう。　“乾杯”、“Zum Wohl”,とドイツ人と日本人が唱和する。
ほどなく部屋は打ち解けあった雰囲気に満ちた。
“お腹すいてる？”、“入間は今、何時？”、“日本からの飛行時間はどれくらい？”　など質問が途切れず続く。　言葉で言い表せない時はジェスチャーで。
父親のラリー・テルヴェイさんとゲストを出迎えに来ていたヤスミンちゃん（10 歳）はまだ少ししか英語を知らない。　彼女はジェスチャーをしたり絵に描いたりやってみせた。
15 歳の宇津木桃子さんは彼女の横に座りうなずき、微笑む。

Wolfratshausen – Eine zehnköpfige Delegation aus der japanischen Partnerstadt Iruma ist am Donnerstag offiziell von Bürgermeister Helmut Forster und seinem Stellvertreter Peter Plößl im Wolfratshauser Rathaus empfangen worden. Im Amtszimmer machte Forster den Besuchern klar, „hier wird gearbeitet". Er erklärte, dass das Rathaus Mitte des 16. Jahrhunderts erbaut und bis heute mehrfach umgebaut wurde. Auf Interesse bei den Besuchern stießen neben Wappen und Fahne der Flößerstadt auch die im Amtszimmer aufgestellten Gastgeschenke, darunter ein Stück eines Taus vom Partnerschiff Oste. Darüber gab Forster bereitwillig Auskunft. Alle Hände voll zu tun hatte dann für ein Erinnerungsfoto der aus Lenggries stammende Dolmetscher Tahama Ippei (rechts). Er durfte sämtliche Kameras der Gäste bedienen. Forster führte die Besucher anschließend noch in den großen Sitzungssaal: Denn dort, so Forster, würden die Beschlüsse gefasst, „in der Hoffnung, dass diese dann auch gut sind". Auch Peter Plößl freute sich angesichts der Tatsache, dass der Austausch gerade bei den Jungen so gut funktioniere. „Denn der Gedanke der Freundschaft muss durch die junge Generation weiter getragen werden." Auf dem Programm stehen in den kommenden Tagen ein Besuch des Schlosses Herrenchiemsee, der Bergwald-Lehrpfad, eine Fahrt nach München sowie die Besichtigung der WGV Quarzbichl.

rf/Foto: Fastner

Das selbe Blatt 4.8.12

ジャパンウィーク

ヴォルフラーツハウゼン＝　日本の姉妹都市入間からやって来た１０人の訪問団員が木曜日にヴォルフラーツハウゼン市役所へ第一市長のヘルムート・フォルスター氏と第二市長のペーター・プレッスル氏を表敬訪問した。
執務室でフォルスター市長は訪問者たちに「ここが執務室、執務をする場所です」と言い、　「この建物は 16 世紀の中頃建てられた。そして今日まで繰り返し修復された。」とはっきりと説明した。
訪問者たちはいかだの町、ヴォルフラーツハウゼン市の旗と紋章だけでなく執務室に置かれている友好関係にある海軍船オステのロープの一部などの贈呈品に興味を引かれた。　フォルスター市長はそれらについても進んで説明した。
記念写真の為に両手いっぱいに通訳の高間一平氏（右）はカメラをかかえている。
彼はゲストのカメラすべての世話をやく。

その後、フォルスター氏は引き続き会議場へ訪問者たちを案内する。
というのも、そこで決議がくだされます。　その決議が良いものであるという期待を込めて、とフォルスター市長は言う。
ペーター・プレッスル氏は青少年交流がうまく運んでいるという事実をまのあたりにして喜んでいる。
なぜならば友好関係の概念は若い世代に引きつがれなければならないからだ。

プログラムとしてこれから数日に渡り青少年たちにヘレーンキームゼー城観光、山、森歩き、ミュンヘン観光そしてクゥアツビッヒルの WGV リサイクリングセンター見学などが準備されている。

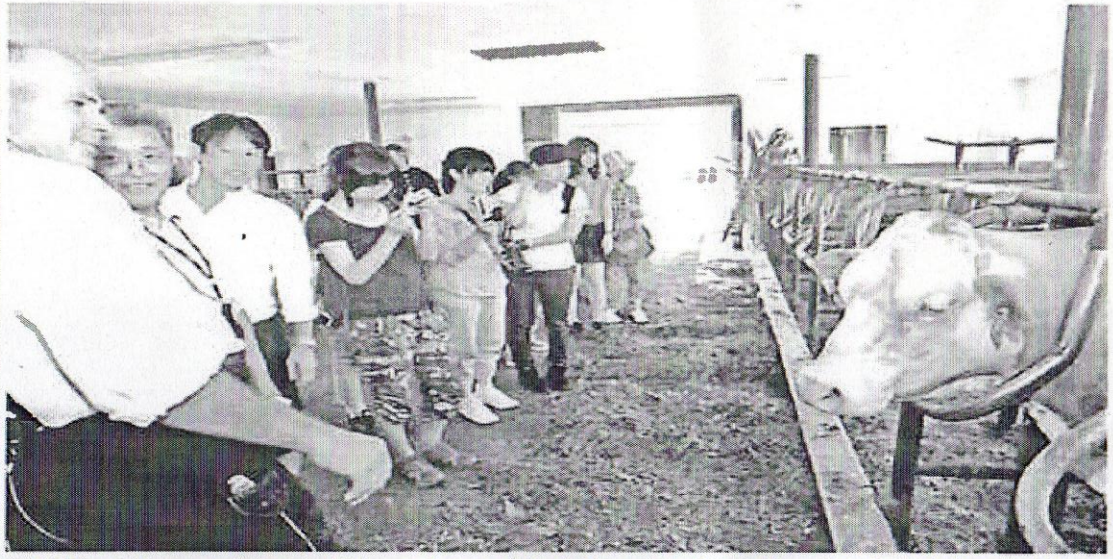
Wolfratshauser SZ 04.08.2012

Auf Erlebnistrip im Kuhstall

Acht junge Japaner aus Iruma haben bei einem Bauernhofbesuch viel Grund zum Staunen. Die Gäste aus der Wolfratshauser Partnerstadt kosten vorsichtig von der frischen Milch und zücken bei jeder Gelegenheit ihre Kameras

VON JULIA MÄHLER

Wolfratshausen – Die Luft steht fast vor Hitze in der länglichen Stallung. Strenger Viehgeruch, der von rund 40 Milchkühen stammt, vermischt sich mit dem Geruch von feuchtem Gras. Als wäre es einstudiert zücken acht japanische Jugendliche ihre Kameras. Auf dem Gesicht von Takuya Hiruma zeichnet sich Erstaunen und Begeisterung ab. Der Mitarbeiter der Abteilung für internationalen Kulturaustausch in Wolfratshausens Partnerstadt sagt, „in Iruma gibt es hauptsächlich Schweinebetriebe und Teeplantagen". Kühe und Milchprodukte seien wenig verbreitet. Hiruma ist einer der Begleiter einer Jugendgruppe aus Iruma, deren Mitglieder in den nächsten Tagen Wolfratshausen und Oberbayern kennen lernen wollen.



Wiederkäuer als begehrtes Fotomotiv: Die jungen Japaner zücken bei ihrem Besuch im Stall von Klaus Heilinglechner (links) sofort ihre Kameras und halten fest, wie es in einem bayerischen Kuhstall aussieht. FOTO: HARTMUT POSTGES

Das Landleben übt auf die Gäste aus der Großstadt Iruma besonderen Reiz aus

Jahr für Jahr kommen Jugendliche aus Japan im Austauschprogramm nach Wolfratshausen, das seinen Ursprung Ende der achtziger Jahre hat. Das neuntägige Programm für die Gäste aus dem Land der Kirschblüten hat die Stadt Wolfratshausen auf die Beine gestellt. Die jungen Japaner begeben sich auf den Walderlebnispfad, besuchen das Schloss Herrenchiemsee und schauen einem Bäcker beim Brezenbacken zu. „Auf einem Bauernhof waren wir bisher noch nie, aber es gefällt den jungen Leuten sehr gut hier," sagt Claudia Holzer, Sekretärin des Bürgermeisters, am Rande des Bauernhof-Besuchs.

Ein Raunen geht durch die Gruppe, als Klaus Heilinglechner, Besitzer des Hofs, einen Futtermaiskolben von seinen Blättern befreit und die sonnengelben Körner zum Vorschein kommen. Weiter geht die Führung durch den Melkraum zum Milchtank, aus dem Christine Heilinglechner ein Glas zapft und herumreicht. Kaito Sumida, zwanzigjähriger Student der Landwirtschaft, rümpft ein wenig die Nase, als er die frische Milch aus dem Tank probiert. Erstaunte Blicke auch bei den übrigen Jugendlichen. „Die japanische Milch ist dünner, diese hier ist ziemlich dick," begründet Chizu Wada, die als Dolmetscherin die Delegation begleitet, das kollektive Missfallen. Überhaupt ist es schwierig, sich mit den Jugendlichen zu unterhalten. Englisch sprechen einige bestenfalls gebrochen, auch Sumida holt zum Beantworten der Frage, ob er denn eine eigene Landwirtschaft nach seinem Studium gründen wolle, die Dolmetscherin zu sich. „Mir ist es egal, ob ich auf einem Hof mitarbeite oder eine eigene Landwirtschaft betreibe," sagt der hochgewachsene junge Mann dann. Eigentlich möchte er nämlich Jäger werden.

Die Übersetzerin erklärt, dass dies oft der Fall sei: Die jungen Menschen studierten, wollten beruflich aber etwas ganz anderes machen.

Vom Hof der Familie Heilinglechner begibt sich die Gruppe weiter zum Hof der Familie Heinrich. Nach der Besichtigung der Mutterschafstallungen gibt es für die Japaner eine bayerische Brotzeit zur Stärkung, da es danach ins Heimatmuseum und zum Kindergarten geht. Antrieb des Austauschs ist für viele der Jugendlichen der Reiz, eine ihnen fremde Kultur kennen zu lernen, die Schlösser zu sehen oder das Interesse an der deutschen Sprache. Kaito Sumida, der Landwirtschaftsstudent, gefällt es in Wolfratshausen. Auch wenn Iruma keine Megacity ist, immerhin leben dort etwa 150 000 Menschen. Die Präfektur Tokyo mit knapp 13 Millionen Einwohnern ist nur etwa 40 Kilometer entfernt. Der Tapetenwechsel kommt an. „Ich genieße die schöne Landschaft und die freundlichen Menschen sehr," sagt Sumida, und es hört sich glaubwürdig an. Wenige Minuten später hebt Kaito ein Kind von der Bauernfamilie für ein Gruppenfoto hoch und streicht ihm grinsend über den Kopf.

2012 年８月 4/5 日　南ドイツ新聞

牛舎で体験小旅行

●入間からやって来た８人の青少年たちは農場を訪問し多くの事に驚嘆。
姉妹都市からのゲストたちは慎重に新鮮な牛乳を飲み、その都度カメラをすばやく取り出す。

細長い家畜小屋はむっとする雰囲気である。
４０頭の牛を所有するストレンガー・フィーゲルッヒさんが湿った草を混ぜる。
しっかり観察して習得するように８人の日本の青少年たちはすばやくカメラをとりだす。
団長の畫間拓哉さんの顔に驚きと感動がくっきりと浮かびあがる。
姉妹都市交流を担当している市の職員である彼は「入間市では主に養豚農家と茶の栽培農園があるが酪農業は広まっていない。」と述べた。
畫間さんは入間市からやって来た青少年たちの引率者である。メンバーたちはこれから、ヴォルフラーツハウゼン市とバイエルン州南部地域で体験を通して学ぶ予定である。

田園生活は大都市、入間からやって来たゲストたちに刺激を及ぼす。
隔年で日本から交流プログラムの元、青少年たちがヴォルフラーツハウゼン市へやって来る。
交流の始まりは 80 年代の終わりである。
桜の国からやって来たゲストの為の９日間のプログラムはヴォルフラーツハウゼン市によって準備されている。　日本の青少年たちは森を体験できる道を歩き、ヘーレンキムゼー城を訪問しブレッツエンをやく為にパン工場を見学する。
市長の秘書であるクラウディア・ホルツァーさんが「これまで農場を訪問したことはなかったが若者たちは大変気に入ったようだ」と農場訪問の折に言う。

農場経営者であるクラウス・ハイリングレヒナーさんが飼料として与えるトウモロコシの穂の周りの葉を開き黄色に輝くトウモロコシの実が現れた時、グループの中からどよめきが起こった。　更に見学は搾乳室の中の牛乳タンクへと進む。　牛乳タンクからクリスティーネ・ハイリングレヒナーさんが牛乳をグラスへ注ぐ、そして次々に渡す。
農学部の学生である 20 歳の住田快登くんはタンクからの新鮮な牛乳を試飲する時、鼻にしわを寄せる。　他の青少年たちは驚きの視線で見つめる。　「日本の牛乳はこれより味が薄い、この牛乳はかなり濃いです」と通訳として同行している和田千寿さんは説明する。
総じて青少年たちとの会話は困難である。　英語での会話は若干上手くいったとしてもたどたどしい。　住田くんも大学を修了した後、農業をやりたいかどうかと言う質問に答える際、通訳を呼び寄せる。　「農場で勤める事も自ら農場を経営することも望んではいない。」と背の高い青年は言う。　というのは彼は実は教師になりたいのだ。
実は、青年たちは大学で専攻したものを仕事にしたいと願うがまったく異なる仕事につくことが多いと通訳者は説明する。

ハイリングレヒナー家の農場からさらにハインリッヒ家の農場へ歩いてむかう。
母羊の家畜小屋を訪問した後、バイエルン風の食事をとる。その後、郷土博物館、そして幼稚園に行くことになっている。
交流の動機は多くの青少年にとっては異国の文化を学ぶことの刺激、城見学、そしてドイツ語への興味である。
農学部の学生の住田快登くんはヴォルフラーツハウゼンが気に入っている。
入間市は大都市ではないが約 15 万人が住んでいる。
1300 万人弱の人口を有する東京都からはわずか 40 ㎞しか離れていない。
ここことは全然違う環境だ。　「私はこの美しい景色と親切な人との触れ合いをとても楽しんでいる。」　と住田くんは言う。　実際その通りだろう。
すぐその後、グループ写真を撮る際に住田くんは農家の子供を高く抱き上げその子の頭をなでる。

Wolfratshauser SZ 10.08.2012

REDEN WIR ÜBER

Bayerische Besonderheiten

Yumi Teraoka wundert sich über Masskrüge und deftiges Essen

Ihre Gastschwester Stefanie Zarnow beschreibt sie als „höflich und super lieb" und als „äußerst probierfreudig" in der bayerischen Kulinarik. Lediglich im „Obazdn" habe sie ein wenig herumgestochert. Dass Geschäfte sonntags geschlossen und abends nur begrenzt geöffnet haben, kennt sie von Iruma nicht. Dort hätten Geschäfte 24 Stunden offen, aber das deutsche System hält sie für „richtig". „Japan macht zu viel", findet sie. Yumi Teraoka (Foto: Pöstges), 20, Studentin der japanischen Kultur, ist eine der acht Japaner der Schwesterstadt Iruma, die neun Tage in Oberbayern einiges erlebt haben.

SZ: Yumi, wie hast du dich am ersten Morgen in Wolfratshausen gefühlt?
Yumi Teraoka: In der Früh dachte ich mir: Hier gibt es wahnsinnig viel Grün.

Was ist der größte Unterschied zwischen Iruma und Wolfratshausen?
Die Menschen in der Stadt grüßen sich untereinander, das finde ich fast beneidenswert.

Hast du dich mal über die Deutschen gewundert?
Ja, einmal über den „Ranzen" vieler Männer und über die Größe des Biers. Die Maßen sind riesig.

Wie groß sind denn Biergläser in Japan?
Meistens sind es 0,33 Liter.

Hast du etwas von Japan vermisst?
Ich vermisste die Hauptprodukte der Sojabohne: Tofu und Sojasauce.

Aber könntest du dich an deftiges, bayerisches Essen gewöhnen?
Ich mag eigentlich alles, vertrage auch alles. Aber die Portionen sind zu groß.

Hast du mal ein Dirndl angehabt?
Heute hatte ich eines an.

Fühltest du dich darin wohl?
Es war am Bauch zu eng und oben habe ich es zu wenig ausgefüllt.

Was war dein schönstes Erlebnis in Wolfratshausen?
Dass ich mich trotz meiner ungenügenden Englischkenntnisse gut mit meiner Gastfamilie verstanden habe, das war sehr schön.

Welcher Ausflug hat dir am besten gefallen?
Schloss Linderhof war toll. Aber besonders gut gefallen hat mir Garmisch-Partenkirchen.

Sprichst Du Deutsch?
Nur zwei Sachen: Grüß Gott und Das schmeckt mir.

Willst du noch einmal nach Deutschland kommen?
Ja, ich würde mir gern alles noch genauer ansehen.

INTERVIEW: JULIA MÄHLER

＊＊＊我々が話したこと---インタビューの中身＊＊＊

寺岡優美さんはビールジョッキの大きさとボリュームのある食事にびっくり！！

彼女のホスト姉妹のステファニー・サーノヴさんは彼女について礼儀正しく最高に愛すべき人であると述べる。また、彼女はバイエルン料理を何でも喜んで試してくれたがオーバッツアーを食べた時ばかりは少しばかりまずそうにしていたと語った。
日曜日に店が閉まることや夜は限られた店しか開いていないことは入間ではありえない。　入間では２４時間開いている店もある。
しかし、ドイツのやり方はむしろ正しく日本は働き過ぎであると彼女は思う。
寺岡優美さん（上記写真）は日本文化を専攻する 20 歳の大学生で姉妹都市、入間からやって来た８人の中の１人であり９日間かけてバイエルン州南部地域を見聞する。

南ドイツ新聞:　ヴォ市での最初の朝、あなたはどう感じましたか？
寺岡優美:　前から思ってはいましたが途方もなく緑に溢れているなと思いました。

新聞:　入間市とヴォ市の間の大きな違いは何でしょうか？
寺岡:　ここでは町の人たち誰もが互いに挨拶しあう姿を見かけ羨ましく思いました。

新聞:　ドイツで驚いた事は何ですか？
寺岡:　多くの男性たちの太った大きなお腹！　ビールジョッキの大きさ、その量はものすごい。

新聞：　日本のビールグラスの大きさはどれくらいですか？
寺岡:　大抵、0.33 リットルです。

新聞:　日本が恋しいと思う点は何ですか？
寺岡:　日本食、大豆製品、豆腐や醤油が恋しいです。

新聞:　バイエルンのボリュームたっぷりの料理に慣れましたか？
寺岡:　何でも好きなんです。食べられます。でも量は多すぎます。

新聞:　民族衣装のディルンデゥルは着ましたか？
寺岡:　はい、今日着てみました。

新聞:　気分はよかったですか？
寺岡:　ウエストの部分は狭く締まっていて上部（胸の部分）は余ってしまうように感じました。

新聞:　ヴォ市で最も素晴らしいと感じたことは何ですか？
寺岡:　私の英語力は十分ではありませんがホストファミリーと理解し合えたことが最もすばらしいことです。

新聞:　どの観光が一番気に入りましたか？
寺岡:　リンダーホーフ城は素晴らしかったですしガルミッシュ・パートナッハ渓谷も特に気に入りました。

新聞:　ドイツ語を話しますか？
寺岡:　二言だけです。　“Grüß Gott“（こんにちは）と“Das schmeckt mir.“（美味しいです）です。

新聞:　もう一度ドイツへ来たいですか？
寺岡:　はい、すべてをさらにゆっくりとよくよく見てみたいのです。

【ドイツの地方紙】

Isar-Loisachbote 10.08.2012

BESUCH AUS JAPAN

Nur Nettes zum Abschied

Eine Woche lang haben acht Jugendliche aus Iruma bei Gastfamilien in Wolfratshausen gelebt. Sie haben die bayerische Kultur kennen gelernt und Ausflüge gemacht. Gestern wurden sie im Rathaus verabschiedet. Und am Mittwoch gab's eine Abschiedsparty in der Flößerei.

VON NINA DAEBEL

Wolfratshausen – Vor allem betonten die japanischen Gäste immer wieder: dass der Aufenthalt in der Partnerstadt das schönste Erlebnis des Sommers war. Ihr Dank galt vor allem den Gastfamilien, die sie offen und herzlich aufgenommen hätten. Das Kompliment bekamen sie umgehend zurück: Volker und Wipke Schuetz sowie Tochter Sophia (19) waren sich darin einig, dass ihr japanischer Gast eine Bereicherung war. Bewundert haben sie an Hinano vor allem ihre Disziplin, ihre Höflichkeit und ihre guten Umgangsformen.

Als die Familien und ihre Gäste am Sonntag ein eigenes Programm gestalten konnten, entschied man im Hause Schuetz, sich Schloss Neuschwanstein von außen anzuschauen. Doch daraus wurde nichts: West- und Nordfassade sind eingerüstet und werden saniert. Also ging es weiter nach Österreich, man aß Kaiserschmarrn und besuchte später – zurück in Deutschland – Schloss Linderhof.

Familie Geller schwärmte von ihrem Schützling. Mai habe sich für alles interessiert, und sie selbst hätten viel von ihr gelernt. Fazit: „Du darfst jederzeit wiederkommen."

Gefragt nach ihren schönsten Erlebnissen, überlegten die Japaner nicht lange: Trachten anprobieren, Brezn backen, Herrenchiemsee, der Bozner Markt in Mittenwald (siehe auch Interview rechts). Kaito, einziger Junge unter sieben Mädchen, brachte mit seiner Antwort alle zum Lachen: „Bier", sagte er nur. Später hob er sein Glas und forderte alle dazu auf, miteinander anzustoßen. „Prost", sagte Kaito und imitierte – längst in Feierlaune – die Geräusche eines galoppierenden und wiehernden Pferdes sowie die eines Feuerwerks.

Auch der Leiter der Delegation, der frühere Sportlehrer Takuya Hiruma, musste zeigen, was er kann: Er schlug ein Rad und stemmte sich aus der Rückwärtsrolle in einen Handstand. Mai und Hinano zeigten den rund 40 Anwesenden eine Teezeremonie, dann wurde gesungen: „Summ, summ, summ, Bienchen summ herum", erst auf Japanisch, dann auf Deutsch. Damit hatte die Delegation bereits im Kindergarten an der Badstraße begeistert.

Zum Abschluss präsentierten die Japaner einen „Tanz für die Fischer", bei dem sie das Einziehen der Netze sowie die Wellenbewegungen des Meeres nachahmten. Bevor Vize-Bürgermeister Peter Plößl das Fest traditionell abklatschen durfte, wurden Geschenke ausgetauscht. Delegationsleiter Hiruma überreichte Bürgermeister Helmut Forster eine Holzkiste, aus der er ein aufgerolltes Gemälde des Fujiyama zog. Vor allem auf die Kraniche im Bild wiesen die Japaner ausdrücklich hin – sie sind Symbol für Glück und Langlebigkeit.

Dürfen jederzeit wiederkommen: (v. l.) Hinano, Yuka, Mai und Yumi bei der Abschiedsparty in der Flößerei. FOTO NOWITSCHI

IM GESPRÄCH MIT YUMI TERAOKA

„Die Bierkrüge sind so wahnsinnig groß"

Sie studiert japanische Kultur. Wie aber gefallen ihr Wolfratshausen und bayerisches Brauchtum? Im Gespräch mit Nina Daebel gibt Yumi Teraoka (20) die Antwort:

Was war Dein schönstes Erlebnis?
Der Ausflug zum Schloss Herrenchiemsee und die Wanderung durch die Partnachklamm. Die deutsche Natur so nah kennen zu lernen, war beeindruckend. Außerdem bin ich glücklich und stolz, dass ich mit meiner Gastfamilie problemlos kommunizieren konnte, obwohl mein Englisch gar nicht so gut ist.

Was hat Dir an Wolfratshausen gefallen?
Dass man sich auf der Straße grüßt. Das ist schon beneidenswert. Außerdem hat mir gefallen, dass es in der Stadt sehr viel Grün gibt.

Hast Du bayerisches Bier probiert
Ja, ein bisschen (lacht).

Und das Essen?
Ich habe alles probiert, und es hat geschmeckt. Die Portionen sind aber viel zu groß.

Was hast Du in Wolfratshausen vermisst
Das japanische Essen.

Hast Du auch ein bisschen Deutsch gelernt?
Ja: „Grüß Gott" und „Das schmeckt mir".

Was ist Dir an den Deutschen aufgefallen?
Mich hat überrascht, dass die Bierkrüge hier so wahnsinnig groß sind. Und mir ist aufgefallen, dass viele Männer einen „Ranzen" haben, also einen sehr dicken Bauch. Das finde ich nicht so schön. Aber die kräftigen deutschen Jungen – ohne „Ranzen" – haben mir sehr gut gefallen.

Ihr habt auch Dirndl anprobiert – wie war das für Dich?
Das Dirndl war am Bauch zu eng und oben zu weit.

In Japan haben Geschäfte sieben Tage in der Woche und 24 Stunden am Tag geöffnet – wie war es, nicht rund um die Uhr einkaufen zu können?
Ich finde es richtig, dass nicht immer geöffnet ist. So haben die Menschen noch Freizeit und können sie genießen.

<u>入間から訪問</u>

別れに際しては好感のもてることばかり。

入間からやって来た８人の青少年たちはヴォルフラーツハウゼンでホストファミリーの下、１週間暮らした。
彼らはバイエルン文化を見聞して知った。そして山（野外）へハイキングに行った。
明日、市役所で別れを告げる。　水曜日にはフロセライでお別れパーティーが開かれる。
何よりもまず彼らは姉妹都市での滞在がこの夏の最も素晴らしい経験であったと強調する。特に感謝しているのは暖かく親切に心を開いて迎え入れてくれたホストファミリーに対してだ。

シュッツ家はゲストのひなのさんについて全員意見が一致している。　彼女の礼儀正しさ、きちんとしつけられた礼儀作法には感心していると言う。
ホストファミリーとゲストは日曜日には単独の予定を組むことができたたのでシュッツ家ではノイシュヴァンシュタイン城を外から見ることに決めた。　しかしそうはいかなかった。西と北側の正面は修復中だったのだ。それでさらにオーストリアまで足を伸ばした。
カイザーシュマンを食べその後、ドイツに戻りリンダーホーフ城を訪れた。
ゴラー家が彼らのゲストの麻衣さんのもとに集まっている。　「麻衣は何にでも興味を示し自ら

もよく学んでいる。　だから、いつでも帰ってきていいからね。」
最も素晴らしい経験はの質問に彼らは長く考えることなく、民族衣装の試着、ブレーツェル作り、ヘレーンキムゼー城、ミッテンヴァルトのボスナーマルクトと答えた。
7 人の女の子の中、ただ一人の青年である快登くんは一言、「ビール」と答え皆を大いに笑わせた。その後、彼は乾杯の音頭をとった。　グラスを高く持ち上げ「Prost！」とドイツ語で言った。皆互いにグラスを打ち合わせ乾杯する。
そしてかれは馬の鳴き声や花火の音など真似てみせた。
また、以前体育教師であった団長の晝間拓哉さんは彼の腕前を披露することになった。側転や後転倒立などである。
麻衣さんとひなのさんは約 40 人の出席者に抹茶をたててもてなした。
それから皆で“ぶん、ぶん、ぶん”を 1 番を日本語でその後、ドイツ語で歌った。
訪問団はすでに訪問したバート通りの幼稚園でそれを歌っていた。
最後に網を引っ張る様子と波の動きを表現した漁師の踊りを披露した。
第二市長のペーター・プレッスル氏が伝統的な一本締めの音頭を取る前には記念品が入間市から贈呈された。訪問団団長の晝間氏がヘルムート・フォルスター市長に木箱を手渡した。　その木箱から巻かれた掛け軸を取り出すと、富士山の情景画が現れる。絵の中の鶴は日本人にとって幸福と長寿の象徴である。

********* 寺岡優美さんとの会話 **********

「ビールジョッキが猛烈に大きい！」

彼女は日本文化を専攻する大学生。
ヴォルフラーツハウゼンとバイエルンの習慣はいかがでしたか？　などの記者の質問に寺岡優美さん（20 歳）が答える。

Q: 最も感銘深い体験は何でしたか？
A: ヘレーンキームゼー城観光とパートナッハ峡谷での山歩きです。
　ドイツの自然を満喫しました。　その美しさは感動的でした。
　さらに私の英語力は十分ではありませんがホストファミリーと問題なくコミュニケーションできる事をうれしく誇らしく思っています。

Q:　ヴォルフラーツハウゼンでは何が気に入りましたか？
A:　道を行き交う人々が挨拶を交わし合うことに感心しました。羨むべき素晴らしい事だと思います。　その上、町に大変緑が多い点が気に入っています。

Q:　バイエルンのビールを飲んでみましたか？

A:　はい、少し。（笑）

Q:　食べ物はどうですか？
A:　私はすべて食べてみました。　美味しかったです。
　　とにかく量が多すぎますが。

Q:　日本が恋しい点は？
A:　日本食が恋しいです。

Q:　ドイツ語をいくらか学びましたか？
A:　はい、“Grüß Gott”と“Das schmeckt mir.”です。

Q:　ドイツで驚いたことは何ですか？
A:　ビールジョッキがすこぶる大きいことに驚きました。
　　また、多くの男性の大きな太ったお腹にも驚きました。
　　でも、たくましいドイツ人の青年は好みです。　お腹が出てなければ。

Q:　民族衣装のディルンデゥルを試着したんですよね。　いかがでしたか？
A:　胴周りが締まっていて上部（胸の部分）がぶかぶかでした。

Q:　日本では毎日、24 時間、開いている店があるそうですね。
　　ここで 24 時間、買い物することができないのはどうでしたか？
A:　毎日、24 時間、開いていない方がむしろいいと思いました。
　　店を閉める時間を長くすれば働いている人たちももっと自由な時間を持てるし
　　その時間を楽しめると思うのです。

ぶんぶんぶん

【作詞】村野四郎 ・【作曲】ドイツ唱歌

ブンブンブン、ハチが飛ぶ
お池のまわりに　野ばらがさいたよ
ブンブンブン、ハチが飛ぶ

ブンブンブン、ハチが飛ぶ
朝露きらきら　野ばらがさいたよ
ブンブンブン、ハチが飛ぶ

Bienchen sum herum

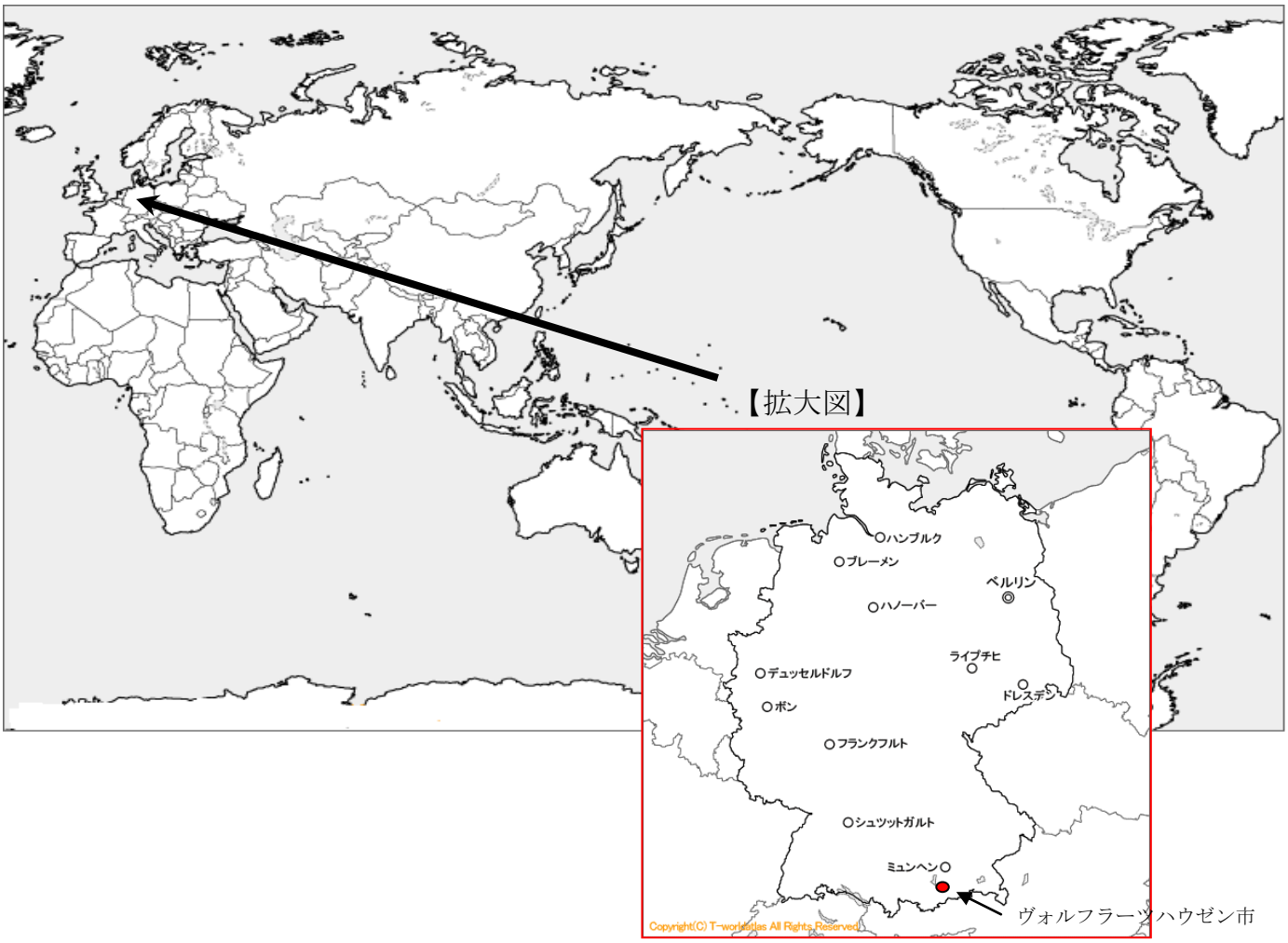
ズム、ズム、ズム、　ビンシェン　ズム　ヘルム

１：　＊Summ, summ, summ,　Bienchen summ herum!
アイ、ヴィー　トゥーン　ディア　二ヒツ　ツー　ライデ
Ei, wie tun dir nichts zu leide,
フリーク　ヌーア　アウス　イン　ヴァルト　ウント　ハイデ
Flieg nur aus in Wald und Heide,
＊繰り返し

２：　＊繰り返し
ズーフ　イン　ブリューテン　　ズーフ　イン　ブリュームシェン
Such in Blüten, such in Blümchen
ディア　アイン　トレプシェン　　ディア　アイン　クリュムシェン
Dir ein Tröpfchen,　　dir ein Krümchen
＊繰り返し

３：　＊繰り返し
ケーレ　ハイム　ミット　ライヒャ　ハーベ
Kehre heim mit reicher Habe,
バウ　ウンス　マンヒェ　フォレ　ヴァーベ
Bau uns manche volle Wabe
*繰り返し

（訳）
ブン、ブン、ブン、ハチが飛ぶ
１：　これこれ、害は加えないから森や野原で飛びなさい。
２：　お花畑で蜜や花粉を探しなよ。
３：　宝物を持ち帰って沢山巣作り励むんだ。



編集・発行

〒358-8511 入間市豊岡１－１６－１
入間市　自治文化課　国際交流担当

TEL 04-2964-1111 内線 2146・2147
FAX 04-2965-0232

URL www.city.iruma.saitama.jp/i-society
E-mail i-society@city.iruma.lg.jp